

# 放送人の会

No.101  
2024.06.14  
グランプリ  
特集号

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館3階 Tel&fax:03-3221-0019 Mail:info@hosojin.jp  
発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉 編集 菅野高至、青木裕子、鈴木典之、逸見京子、田中典子、  
事務局 深尾隆一 須斎恵美子 <http://www.hosojin.jp>

## テレビ年齢だけでも、『還暦』になった その1 父の放蕩

放送人の会 会長 今野 勉

この四月に88歳になった。僕が米寿で妻が喜寿になるのを祝って、僕の4人の弟妹と妻の弟のファミリーが40人ぐらいい、横浜のホテルに集まる。

今野家は北海道の山の中の小っちゃい炭鉱登川の長屋に住んでいた。そこはもうなくなっていて誰も住んでいない。今は一家、全部バラバラに別れて北海道から岡山まで、なんでもこんな散らばっているのかというぐらいい散らばっている。札幌、水戸、横浜、岡山、東京。

夕張炭坑の前は秋田市に住んでいた。小学校4年のとき、お袋に連れられて自分が生まれた町に行く。それは終戦直後で、実家に帰れば農家だから食べられるだけ食べられると子供を連れて里帰りをしたのだ。その時に、ものごころついて初めて、自分が生まれた家を見た。4間間口の床屋さん、村の床屋だが二つの大きな椅子があつて、客用の大きなガラスがついた瀟洒な作りだった。誰か知らない人が床屋をそのまま引き継いでいた。

ここで僕が生まれたのは、親父が29歳でお袋は20歳だった。生まれて4歳のときに秋田市から北海道の炭鉱に移住した。

床屋をなんでやめて、炭鉱の長屋に住むことになったのか、子供心にもちよつと変だ不思議だなと思っていた。徴兵逃れだと聞かされていたが、お袋は何も言わなかったのだからと分らなかった。

「勝つてくると勇ましく」、炭鉱夫が兵

隊に取られると駅前でみんな揃って、日の丸降って列車を見送り、列車から遺骨で帰ってくる、英霊を迎える歌を歌う。

「襟を正して厳かに 感謝捧げよ倒れたる我が皇軍の」、今でも全部歌えるね…。

子供心に、あれ、みんな死んで帰ってくるじゃないか、徴兵逃れで炭坑にきたのはおかしいな、とだんだん思いはじめた。

その謎が解けたのは、ずっと後だ。僕はもう70過ぎていた。お袋が本当のことを言ってもいって、なぜか思ったのだ…。

暮れにホテルのテレビで、第九の演奏会を見て、バイオリンを弾いてる弦楽の部分がパーツとアップで画面に映つたら、お袋が「うちのお父さんもバイオリン弾いてたね」とボツンと言って、「えっ、なに！」って思ったのだ。それでちよつと聞いたら、さすがにその時はもう話してもいいかなという感じで、親父は三味線とかバイオリンとか尺八、そういうものを家中にいっぱい持っていたという。

そもそも床屋を開く金はある、お袋の実家が出してくれた借金で、のちのち商売で利益を上げたら返す約束だった、丸々ただで建ててくれたわけじゃない。

だけど親父は、夕方になると尺八と三味線を持って店を出て、どこかで宴会があると勝手に入り込んで歌って…という生活になったのだ。

やがては火の車になって、店を売るしかないくらいの借金が溜まり、店を売って借金返

して北海道の炭鉱に行く。親父の姉が炭坑に行つたのを頼ったのだ。

炭坑では長屋はタダだし、住居費、光熱費水道代、あらゆるものがタダだった。子供のときは分からなかったけど、すごくうまくできているのは、給料は現金でそんなに高くない、でも住居費・光熱費も全部タダで、便所の汲み取り代など、あらゆる生活が一切金が掛からないようになっていた。

ということは、もうお金は少ないけど暮らせる。だが外に出ようと思つと、手元に金がないから出られない。一回、炭坑の長屋に入ったら、一生でこでないきやいけない、そういう仕組みだった。よく考えている仕組みなのだ。人の入れ代わりが無く、割と安定した経営ができる、北海道炭坑株式会社が考えたんだね。親父の放蕩が原因で、夕張に行つた今野家は何十年もそこで住むことになったのだ。

一九五八年夏、全くの偶然でTBSの試験を受ける羽目になる。東北大学社会学部3年、当時は報道志望だったから、新聞社教社と、テレビ局にも報道セクションがあるからと四社ぐらいい願書を出した。だが、いくら経つても受験書類が届かないので、大学に行つて担当の事務の女の人に、何も返事が来ないんだとどと言つたら、その女性が飛び上がるように驚いて、「願書を出すのを忘れていた！」って、僕の方だけ全社、忘れていたのだった。

茫然としている僕に、「ラジオ東京であれば間に合います！」って女性が叫んで、それでギリギリ、ラジオ東京の入社試験には間に合ったのだ。

——人生って本当にわからない。

(続く)

(二〇二四年5月1日取材 文責・菅野)

# 放送人グランプリ2024第23回

◇グランプリ大賞 ◇ NHK

NHKスペシャルE-TV特集「『霧』の深層」シリーズ取材制作チーム

◇グランプリ優秀賞 ◇ 山口放送

NNNドキュメント'23「じゅめがね」部落と差別」

◇グランプリ優秀賞 ◇ WOWOW

「連続ドラマWフェンス」

◇グランプリ優秀賞 ◇ NHK

連続テレビ小説「らんまん」

◇グランプリ優秀賞 ◇ ニッポン放送

「関東大震災から100年…112歳の証言と未来の提言」

◇グランプリ特別賞 ◇

宮路りか (株)NBCシニアテレビ部長

◇グランプリ特別功労賞 ◇

松尾羊一

◇グランプリ特別功労賞 ◇

浜村淳

「第10回大山勝美賞」

家富未央 プロデューサー NHKエンタープライズ

松本佳奈 ディレクター フリー



吉村太郎・ご夫妻 藤原高峰 上柳昌彦 遠藤竜也 熊野隆文  
 渡邊良雄 松川博敬 影山遥平 石原大史 牧野大輝 佐々木聰  
 長田育恵 宮路りか 家富未央 今野勉 会長 松本佳奈 北野拓 高江洲義貴  
 (2024年5月25日・前3列のお名前を表示・敬称略)

## 放送人グランプリ2024 開催の経緯

※この稿・敬称略

今年度の選考会議は、会員の投票をもとに、4月3日（水）テレビマンユニオンの会議室で行われました。出席の贈賞委員は、石橋映里、岡室美奈子、小川和之、木原毅、菅野高至、長井展光、深尾隆一、三原治、矢島良彰、渡辺紘史（委員長）



なお、選考会の前後にアドバイザー委員の河野尚行、鈴木典之、曽根英一、中崎清栄、林健嗣、村上雅通に意見を求め、4月中旬、上記のように決定しました。

大山勝美賞選考会議は4月12日（金）に行われました。今年度より、委員長が鈴木嘉一、委員は石橋冠、内山聖子、次屋尚、八木康夫、若泉久朗、渡辺紘史。議論を経て、上記のように決定しました。

なお、この経緯は、鈴木委員長が『各委員会プロジェクトより』（28頁）に寄稿しています。宜しく参照下さい。

☆ ☆

### 第23回の贈賞式は、

5月25日（土）午後3時より

千代田放送会館2Fで開催しました。

式の司会進行は、渡辺紘史贈賞委員長が務めました。

なお、本当の表彰状には句読点がありませんが、会報では読みやすくするため、句読点を付け、数字の表記を変えています。

### 開会の辞

今野 勉 会長

会長をしております、今野です。今日は皆さんおいでいただきましてありがとうございます。放送人グランプリというのは、数あるいろいろな賞の中で、我々放送人が仲間の放送人に対して、「いや、いい仕事をしてくれたね」と言つて、「おめでとう、ありがとう」という賞です。



ですから、賞を贈るこちらは大変嬉しいと同時に、その後で宴会やつて、お酒を飲むというのが非常に楽しみな会ということになって

おりますので、今回も受賞者とともに、式の後お酒を飲んで楽しみたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

（拍手）

### 大山勝美賞 贈賞経過

鈴木嘉一 大山勝美賞 審査委員長

私は2回目から選考委員をしていますが、今回から選考委員長を務めることになりました。



放送人の会の設立メンバーで、代表幹事などを務められた大山勝美さんが亡くなって、この秋で10年になります。大山さんは後進の育成に力を入れたということで、大山さんの名前を冠した賞が設けられました。今年はその10回目に当たり大きな節目の年です。選考委員会の方は少しメンバーが変わりました。初代委員長の石橋冠さん、2代目委員長の八木康夫さん、そして私、去年から委員に加わった元NHKの若泉久朗さん、きょうの司会をされている渡辺紘史さんのほか、2人に加わらせていただきました。テレビ朝日の内山聖子（さとこ）さん、それから日本テレビの次屋尚（つぎや・ひさし）さんです。お二人とも大山勝美賞の受賞者で、プロデューサーです。

今回、以上のメンバーで選考委員会を開きました。事前に推薦していただいたら、8人の

名前が挙がり、議論をしました。大山さん自身がドラマのプロデューサーとディレクターを両方兼ねていましたので、大山賞は毎年、プロデューサーとディレクターを一人ずつ選ぶという原則でやってきました。今回、プロデューサーでNHKエンタープライズの家富未央さん、ディレクターではフリーの演出家の松本佳奈さんに決定しました。

たまたま女性2人になったんですけれども調べてみたら、女性2人というのは第2回目以来です。毎年2人ずつ選んでいますので、今まで受賞者が20人おりますが、男女別では、今回を含めて男性が11人、女性が9人ですから、ほぼ拮抗しているという感じですが、

お二人の贈賞理由はこれから述べられますけれども、去年はディレクターとして風間太樹（ひろき）さんに賞を贈りました。フジテレビの「Heart」を演出した方で、史上最年少の31歳での贈賞でした。今回は、お二人とも若手の域を越えた中堅としてすぐ脂がのつて、いい仕事をしていらっしゃると思います。10回目の節目にふさわしい人が選ばれたと思っております。（拍手）

### 第10回 大山勝美賞 贈賞

会長より表彰状とトロフィー、盾、ささやかな賞金が贈られました。



家富 未央 氏

△表彰状 あなたは二〇二三年NHKスペシ

ヤルとして放送された単発ドラマ「神の子はつぶやく」で徹底した取材に基づき、知られる『宗教2世』当事者の葛藤を真正面から深く掘り下げました。これまでもドラマの新しい表現を開拓した「光秀のスマホ」や「不要不急の銀河」。語りづらかった女性の生理を繊細に描いた特集ドラマ「雨の日」は注目を集めました。

今後も取材力とチャレンジ精神を発揮したドラマ作りを大いに期待して、大山勝美賞を贈ります。

#### 【批評選理理由】 八木 康夫（委員）

放送の1週間前にドキュメンタリーで、同じ宗教二世を扱ったNスpegが 나왔ましたが、僕は正直言ってドラマの方がずっと良かったと思います。僕はドラマの人間だからそう思うのかもしれませんが、社会派のテーマをドキュメンタリーで扱う場合とドラマで扱う場合との違いは、ドキュメンタリーは見ていて「そうなんだ」とは思いつつ、どうか他人ことに見ちゃうんですね。



でも、家富さんもそうでしょうが、ドラマの場合、同じ様なことが自分たちの身の回りですごく起きるかもしれないというスタンスで作られていると思うんですね。そういう意味では、社会派のテーマをドラマで作る意義があると思うんですね。ですから『神の子

つぶやく』は、見ていて身につまされるというか、自身も考えさせられるドラマだと思いました。

家富さんとは何度かお話しする機会がありまして、最初はNHKのドラマ部に、この企画を持って行ったら、門前払いにあって、Nスpeg班に持ち込んで実現したと聞いています、そういう情熱があつてこそ実現したドラマだと思います。

まだまだこれからも活躍が期待できる方だと思います。今後も頑張ってください。おめでとございます。（拍手）

#### 【受賞の喜び】 家富 未央 氏

家富と申します。この度は本当に偉大すぎるというか、すごく素晴らしい賞に私を選んでいただけて皆さんに心から感謝しております。ありがとうございます。

八木さんに今ご紹介いただいたんですねけれども、私はNHKですと北海道の札幌局というところで4年間ディレクターを務めて、その後、東京のドラマ部にきて、今NHKエンタープライズにいて、プロデューサーをさせていただいています。

元々すごく怠け者なので、こういう偉大な賞をいただいて、もう怠けられないぞ、頑張らなきゃと思っています。

北海道で取材をしていたときは農業の取材ばかりしていて、特に思い出深いのが酪農家さんの取材をやッて着て泥だらけになりながら取材をしたというのが、自分の根底にあると思っています。そのときにすごく素晴らしい酪農家さんのご夫婦に出会って、ご夫婦は後継者がいないという大変な問題を抱えていたんですが、当時まだ20代だった私を毎朝迎えて、美味しいご飯を作ってくださいって、バ

クバク食べて一緒に過ごしながら取材をさせていただきました。本当に働き者で、でも、すごく大変な未来を背負っている方だったので、なんでこんな笑顔でいられるのかなとか、あまりにも自分にわからないことが多すぎて、取材って何なんだろうと思いつながら、札幌でディレクターをしていました。

満足な取材を自分は到底できていない、大変なものに挑まなきゃいけないという気持ちのまま、渡辺美佐子さんご出演の朝ドラ『おひさま』では、実は助監督で担当させていただいておりました。

『おひさま』や『朝ドラ』『大河ドラマ』などで、いろんな取材の機会をいただいて、今も思いつくのはやっぱりあのときの酪農家のお母さんだと思いつながら、様々な題材に向き合つて、まだまだ足り着かないけども、取材に挑んでみようという気持ちでやっています。

また、新しい取材でドラマを生み出すことを諦めず、怠けずにやりたいと思っておりますので、こんな良い機会を本当にありがとうございます。（拍手）



#### 松本 佳奈 氏

＜表彰状＞ あなたはフリーの演出家として脚本も兼ねた「ペンションメッツァ」など一話完

結の30分ドラマや深夜ドラマで、独特の作風を磨いてきました。二〇二三年度は質量の両面での活躍に目を見張られました。WOWOWの「フェンス」では、米軍基地問題で揺れる沖縄を舞台にした性暴力事件に取り組む一方、関西テレビの「春になったら」では、余命を宣告された父と結婚を控えた一人娘との日々を繊細にユーモアを交えて描き、新境地を開きました。今後の更なる活躍を大いに期待して、大山勝美賞を贈ります。（拍手）

#### 【批評選理理由】 鈴木 嘉一（委員長）

おめでとございます。松本さんとお会いするのは今日が初めてなんですけど、お名前は6年前から知っていました。見ている人は少なかつたかもしれませんが、二〇一八年にWOWOWで放送された「コートダジュールNo.10」という一話完結の30分ドラマがありました。小林聡美さんと大島優子さんが毎回違う役を演じるという変わったドラマでした。この監督・脚本として松本さんの名前が出ていて、頭に刻んだんですね。その後、同じWOWOWの「ペンションメッツァ」（二〇二二年放送）でも、松本さんは脚本と演出を兼ねていました。同じく小林聡美さん主演で、ペンションのオーナーと客とのやり取りを一話完結形式でつづりました。これもまた独特の世界というか、空気を醸し出していました。遡ってみるとおそらく三谷幸喜さんの初期の代表作の「やつぱり猫が好き」や、荻上直子監督の「かもめ食堂」「めがね」という映画などの系譜に通じるような、普通の連続ドラマと全然違う30分の非常に個性的なドラマの作り手というところで知っていました。

目を見張ったのは去年から今年にかけての活躍ぶりです。まずWOWOWの「フェンス」

では、沖縄の基地問題から夜の世界までをもう体当たりのように撮っているかと思うと、木梨憲武さんと奈緒さんが親子を演じた関西テレビの連続ドラマ「春になったら」は、全然違って、今時珍しい心温まるホームドラマでした。同じ演出家が両方撮っているとは思えないようなチャレンジ精神で、表現領域を大きく広げられました。「今年は松本さん以外にいない」と思っている委員が私だけじゃなく、何人もいまして、今回の受賞に至ったということです。(拍手)

## 【受賞のようば】 松本 佳奈 氏

ありがとうございます。松本佳奈と申します。この度は、このような私が貰っているのかしらというようなすごい賞をいただけてとても嬉しくて、長くやっているとこんなこともあるんだという気持ちであります。



今、鈴木さんが仰っていたように割と日常的なモチーフのお話をずっと撮ってきたんですけど、去年から今年にかけては、今まで自分がやったことのない題材とかテーマの作品をやらせて撮らせていただくことが多くて、自分でも本当に出来るのかなって思いながら、でもいつまでも同じことをしていてもしょうがないなと思って、何か新しいことをやって

いかなきゃいけないという気持ちで、去年はずっと仕事をさせていたでいて、それがこのように皆さんに見ていただけて、面白かったって言うていただけるのがすごく嬉しいと思って、いい1年だったと思っております。

私はフリーでやってるんですけども、元々コマーシャルのディレクターからスタートしていて、CMをずっと中心でやってたんですけど、途中からドラマを撮るようになって、でもやっぱりCMとは違って、長い間たかさんの人たちと2か月から3か月一緒に仕事をして、だんだん気持ちに通じ合ってきて、最後ちょっと別れるのが寂しいぐらいになるというチーム感みたいなのがすごく楽しくて、いつの間にかドラマばかりやるようになったんです。でも、監督ってどういう仕事なんだろうって未だによく分からないんですけど、撮影部とか照明部みたいに技術があるわけでもないし、何をもって監督って言うんだろって、もちろん今も答えがあるわけではないんですけど、そのときに集まったいろんな才能の人たちと一緒に物を作るというのがやっぱりすごく楽しくて、それがドラマの醍醐味だなと思っています。

今まで、本当にいい縁がたくさんありました。スタッフも俳優もそうですけど、たくさんの人に助けていただきながら力を借りながら作品を作ってきたと思っております。いろんな人の力が集まって、それぞれに違う作品が出来上がってきたんだと思っております。

これから素敵な人たちと一緒に作品を作っていければいいなと思っております。今回はどうもありがとうございます。(拍手)

## 渡辺 美佐子 氏 花束贈呈と挨拶

皆様こんにちは。今日は本当にいいお天気で、賞にふさわしいいいお天気よかったですね。大山のことを毎年思い出させてくださっている放送人の方にお礼申し上げます。ありがとうございます、嬉しいです。

それから大山の賞を今年いただいたのが、お二人とも女性の方だったので大山もニンマリと喜んでいと思います。



私がテレビの仕事、ドラマの仕事をやっている頃は、ネットフリックスとかUNEXTとか全然何にも無かったので、テレビドラマを見ていただく機会はたくさんあったと思うんですけど、今はもう数え切れないくらい、見るもの聞くもの遊ぶものがいっぱいある中でドラマを作るのはすごく悩ましいことだと思います。

でも、これからもいっぱい悩んで、「これが今のテレビドラマだ！」っていうような作品をぜひ作っていただきたいと思っています。本当におめでとございます。(拍手)

## 放送人クマンプリ2024 贈賞経過

渡辺 紘史 贈賞委員長

この賞は、放送人による放送人のための賞ということで、放送人の会の会員からの投票をベースに、ここにいる贈賞委員が合議して決めるという仕組みでやってきました。今年の投票は69の作品、個人に対して120票の投票がありました。去年は51に対して77票ということでしたので、票数的にはずいぶん増えたと思います。

今年の投票の中で一番多かったのが、NSP、ETV特集で3回に分けて放送された「冤罪の深層」シリーズですね。それが14票、それから大森淳郎さん個人と、NHKの彼の作品「ラジオと戦争」、それから昨年二〇二三年6月に大森さんの本が出版されたのをきっかけに放送されたラジオの番組「ラジオと戦争」、それらを合わせて8票の投票が集まりました。その次はNHKの連続テレビ小説「らんまん」で5票でありました。他、個人作品合わせて2、3票がいくつかありましたが、あとはほぼ全部1票の単票でした。去年も言いましたけれども、放送人の会の会員というのは多数に流れることを嫌うというか、そういう気質の方が多くで、こういうばらつきが出たというのは当然のことと思っています。

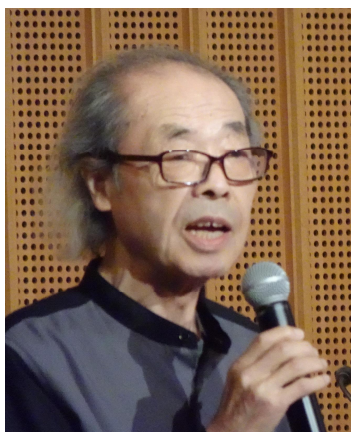
その結果を受けて4月3日に贈賞委員が集まって会議を開き、今回の決定になりました。2番目に票を集めた大森さんの「ラジオと戦争」は、放送が二〇〇九年と二〇一〇年の作品※で、そのときに大森さんは受賞しています、加えて今回注目されたのは出版がきっかけと

いうことで、大森さんについては受賞から外させていただくこととなりました。

結局、多数票を集めた作品からは「らんまん」と「冤罪シリーズ」が選ばれました。

結果はご存じのようなことになりましたが、いくつか申し上げれば、戦争に関する番組がたくさんあつて、今年も個人的にはいくつか良い作品があつたと思うんですが、なかなか今年も選考には挙がりませんでした。

それからもう一つ、ここ数年課題となっていたバラエティー、エンターテインメントの番組がやっぱり挙げることができず、残念でありました。



グランプリの物差しは、これも毎回言っていますが、「大より小、強いものより弱いもの、中央より地方、高い視点より低い視線」ですが、今回、何が選ばれたのかと言われれば、「作品が今の時代にきちっと、どれだけ向き合ってきたのか」ということで決まったという感じがします。

贈賞委員の岡室さんが今年4月に本を出されて「テレビドラマは時代を映す」というタイトルですが、まさにテレビは時代を映す鏡であります。時代にどれだけきっちり向き合つて、今の人の考えと思いにどれだけ寄り添つて作られたのか、その志の高いところに

選考が向かったのではないかと思います。結果から、そう判断していただければと宜しいかと思えます。以上が経緯でした。(拍手)

※2009年8月E TV特集「戦争とラジオ」、2010年E TV特集「敗戦とラジオ」

## 放送人グランプリ2024 贈賞

会長より表彰状とトロフィー、盾が贈られました。

### ◇グランプリ 特別賞◇

NBCソシアプロデューサー

宮路りか氏

＜表彰状＞ あなたが制作した「大輝、15の春」と「牛と生きる」長崎・鷹島：…あつたか家族

〜」が昨年と今年、NHKワールドで世界に発信されました。地方の民放局の作品が選ばれるのは極めて稀です。取材対象はほとんどが長崎に暮らす「普通の人々」です。足元にある素材が、あなたの手にかかる輝きを増します。「大輝、15の春」では一人の障害者を番組を替えて何度も紹介しました。放送のたびに障害が改善していく様子は見る者に勇気を与えました。長年、何気ない地域の出来事や人物を拾い上げ伝え続けてきたことに、ローカル放送の神髄を見せられる思いがします。

あなたの優れた業績を称え、今後の更なる活躍を期待して放送人グランプリ特別賞を贈ります。(拍手)

祝辞 渡邊理田 村上 雅通(委員)

宮路さん 本当におめでとございます。私は壇上で舞い上がりたいくらい喜んでおります。そして、おそらく、九州の多くの制作者た

ちが喜んでいいると思います。今や宮地さんは九州の若い制作者たちの目標にもなっているディレクターでもあるからです。

贈賞理由は表彰状にも書いてありましたし、映像をご覧になっておわかりになったと思います。宮地さんの作品に出てくる人物は長崎に住む、周りの人たちなんです。VTRで紹介された牛飼いさん一家も、それから寿司屋の夫婦も、他にも、お父さんの遺志と仕事を継いで切り絵をやっているお嬢さんがいました。ドスコイ、高校の相撲部がいました。このように、宮路さんの作品に出てくるのは、原爆でもなく、カネミ油症でもなく、諫早湾干拓でもない、ほとんどが市井の人たちです。その作品が全国のコンクールで次々と賞を取つて、そして世界中に放送されるという、これまた驚きの連続です。



宮路さんは8年前から、「大輝くん」という身体障害者取材しています。身障者の番組というところ、どうしても涙なしに語れないとか、だんだんその症状が悪くなつていくというストーリーをよく見かけるんですけど、宮路さんの作品はそうじゃないんです。大輝くん本人がナレーションまでやる、そして病状がどんどん回復していくんです。ところが今年、彼が骨折をしましてギブス生活に入りました。その写真がなぜか宮路さんからではなくて、

宮路さんを信奉するディレクターから私のところに届きました。

大輝くんがギブスが巻いてある写真なんです。私に残念と思うよりも、むしろ「ぶつ」と笑つてしまいました。それくらい大輝くんは明るかった、安心しました。

宮路りかさんの作品に登場する人たちはみんな明るいです。みんな一生懸命なんです。それは、彼らも一生懸命なんだけれども、宮路さんの一生懸命さに、彼らがおそらく自然と応えているんじゃないか、そんな気がしてなりません。これからも身近な人たち取材して、そして九州から世界に発信していっていただきたいと思います。本当に本当に、本当におめでとございます。

【賞の受け】 宮路りか氏

宮路りかと申します。この度は、身に余る賞をいただいて感激しています。ご推薦いただ



いた村上雅通さんには足を向けて眠れないと思つています。本当にありがとうございます。私が制作を続ける九州には村上さんを初めとして、ドキュメンタリーの俊英がたくさんいらつしやいます。その中のお一人が今は亡きRKB毎日放送の木村栄文さんです。

「窓をあけて九州」という今も九州の朝を代表する番組として続いている番組があります。そこで栄文さんに初めてお目にかかり、何とか栄文さんに認めてもらいたいと企画会議に臨んだ日のことを思い出し、またその流れでいろんな番組を作らせてもらった、たくさんの方の顔が今、浮かんでいます。「大輝くん」もその朝の番組で最初に放送を始めた。

栄文さんに教えてもらったことのひとつが、重たいテーマを扱うときにこそユーモアの感覚を忘れるなということでした。「大輝くん」も本当は重い病気を抱えているけれど、彼の人間力が素晴らしく明るく前向きで、ナレーションもとても上手で、「大輝くん」の魅力を番組で表現したいと思いました。

番組のナレーションをしたことがきっかけとなり、ローカルのFMラジオの冠番組を持つようになって、テレビってやっぱりいろんな力を持っているんだなと改めて痛感しています。

(大輝くん)



今も放送が続く「新窓をあけて九州」は、

九州の作り手にとっては本当に大切な制作の場です。私自身、これからも作り続けたいと思っています。

私はテレビっ子でした。「ベルトクイズQ&Q」という番組に出演し、フロアディレクターのお姉さんがあまりにも格好良くてテレビの世界に入りたいと思ったんですが、大学卒業後、百貨店や教員を経て、潜り込んだのがNBC長崎放送のレポーターです。

喋りも下手で愛想もなく、駄目駄目で1年でクビになりそうなところを、大野陽一郎ディレクターが拾ってくれてADへ……一から番組作りを教えてもらいました。そのときのご縁がなかったら、今日はなかったと思うとやっぱり人間の縁ってすごいなと思います。

私が出会う皆さんは本当に魅力的な方が多く、その出会いの運と縁に感謝しています。この素晴らしい賞をいただいたことを励みに、今度は後輩たちに番組作りの面白さ、そして苦しさも伝えていけたらなと思っています。

これからも縁を大切に、できる限り長崎で番組作り続けていきます。本当にありがとうございます。(拍手)

#### ◇グランプリ 優秀賞◇

NNNテキストメント<sup>23</sup>

#### 「いろめがね」部活と差別」

＜表彰＞ 形を変え、その深刻さを増すネット時代の部落差別問題。この番組は被差別部落出身を明かし差別と闘う当事者達に寄り添い、彼らの不安や怖れ、怒りや悲しみの言葉を丹念に描き出します。

声高ではなく淡々と事実を積み重ねること、見る者は自身の無関心や無理解こそが差別の根本にあることを知ります。日頃から人

権や差別に目配りを怠らない山口放送と制作者佐々木聰さんが長年積み重ねたニュース・ドキュメンタリーの集大成です。

佐々木さんの今後の幅広い活躍を期待して放送人グランプリ優秀賞を贈ります。

#### 「初辞 瀬邊理田」 渡辺 紘史 (委員長)

話に入る前に、お詫びを申し上げます。本来推薦した者がここに立つべきなのですが、今日はやむを得ずの欠席となりましたので、私が代理で幾つかお話をいたします。

さて、この作品のディレクター・プロデューサーの佐々木さんはご存知の方が多いと思いますけれど、「ふたりの桃源郷」という映画にもなったドキュメンタリーがあります。素晴らしい作品でした。それから、戦争をテーマにした「奥底の悲しみ」とか「記憶の檻」などで本当に数多く受賞をされています。ですから本来であればもっと以前に、我々がマークしなきゃいけないかったんですが、放送人グランプリはこここのところ佐々木さんに全くノーマークでおりました。

今回、「いろめがね」と個人に対して複数の投票がありまして、贈賞を議論をさせていただきました。佐々木さんに個人賞というのにもまさに今更じゃないかという意見もあって、私も感動して見ました「いろめがね」に作品賞を差し上げようということになった次第です。

正直言って私は「二人の桃源郷」とそれから、この「いろめがね」、それから、同じ昨年の「幸せフラガール」、周防大島とハワイとの駆け橋を願って留学して活躍している娘さんの話でしたが、この三本の番組しか見ていません。ですから、この3本をベースにお話をしますが、

私、番組を見ていてですね、ドキュメンタリーなんだけれど物語性に溢れているんですね。番組の中で、差別に声を上げる川口さんも家族もそれぞれ立場が違うんですけど、みんな愛おしく感じるんです。

何でだろうかと思つて三つの作品以外の作品歴を調べてみると、どうも佐々木さんはご自身が愛おしいとか、気になるといような人たちの出会いを、まさに日記をつけるようにして番組にしているというような気がしました。番組は、佐々木さんの私小説というような感じもするんですね。だから見る人が、多分同じように引き寄せられて自分の身として、

自然にインソップの寓話の北風と太陽ではありませんが、テーマを掲げて「これだ結論は！」と言つて一方的に人を引きずり込むのではなくて、佐々木さんの心の温かさで溶かされて動かされていく、まさに太陽のようなものとして番組を感じられるのかなという気がしました。

もしかしたら的外れかもしれませんが、そんな感じがしました。

これ以降のお話は、ちょっと差し出がましくて厚かましいんですけど、地域放送局は、言ってみれば今は非常に大変なときでもあります。かつて、山口放送には磯野恭子(やすこ)さんという大・名ディレクターがいらっしゃいました。佐々木さんもいろいろと今若手を指導する立場になられているとお聞きしていますので、磯野さんに倣うわけではないでしょうけど、山口放送の指導的な立場になられて若手を引っ張って地方局の発展に一役買っていたければありがたいと思っています。そのときにはぜひ放送人の会も応援したいと思っております。どうも、おめでとうございます。ありがとうございます。(拍手)

## 「賞のうけ」 佐々木 聡氏

山口放送のディレクターの佐々木聡と申します。この度はこのような栄えある賞をいただきましてありがとうございます。何を話せばいいのかと思つて今、渡辺さんのお話を聞いているうちに頭が真っ白になりました。

先ほど渡辺さんのお話にありました山口放送の先輩の磯野恭子さんについてですが、亡くなられて何年も経つんですけれども、お辞めになる最後の5年間くらい指導していただきました。そのときのことを瞬間瞬間をスライドのように覚えていて、言葉もポンポンと心に残っています。



例えば「ディレクターは孤独なのよ」とか、「諦めずにとにかく作り続けるのよ」とか、「プロットを積み重ねるのよ」とか……。いくつもいくつも言われましたが、その時はよくわからないんです。けれども10年、15年、20年、振り返ればもうすぐ30年ぐらい経ちますが、今になって「ああなるほど」と思っています。

そして、渡辺さんがおっしゃったように、今、自分も指導をする立場でもあり、ディレクターをやる時間よりもプロデューサーをやる

時間の方が長くなっています。その自分が、先輩たちに同じように何かを残せているかという、ちよつと疑問なんですけれども、これからは少しでも多くの後輩たちが、地方でドキュメンタリーを作り続けられるように努力したいと思っています。

今日、評価をいただいた番組は被差別部落の問題を通して、人権というものに向き合った番組です。恥ずかしながら僕自身、人権と真正面から向き合うのはこれが初めてで、取材では自分の至らなさに気づかされました。それに、人権というものは、これまで自分がやってきた様々なヒューマンドキュメンタリーや戦争、反戦など全ての番組に通じるものですが、これまで僕は、そうだと気づかず無自覚のうちに番組を作っていたということにも気づかされました。つまり、今回の取材活動を通して初めて、人権というものが放送の根っこにあるのだというのを、当事者の皆さん、関係者の皆さんから教えていただいたということです。

この番組が放送に至るまでに、ローカルで10分から12分の特集を13回ほど重ねました。その度にもちろん苦情や抗議も来しました。報道部だけでなく、総務部、編成部の人たちもその対応をしてくれたり、会社を挙げてチェック体制を整えてくれたりと、背中を押してくれる大きな力もあって、放送活動が続けることができました。取材の中では、今回も多くの学びがありました。この学びを大切にしたい、これからも努力していきたいと思っています。本当にありがとうございます。（拍手）

## ◇グランプリ 優秀賞◇ 連続ドラマW フェンス

## 表彰状

類い希なる才能と迸る情熱と勇気ある人々が集まって、長く語り継がれるべき沖縄の物語が作られました。ドラマは二〇二二年本土復帰50年の米軍基地の島、元ギャバ嬢の雑誌記者、カフェバーを営むブラックミックスの女性が連続的暴行事件の真相を追います。

100人以上の徹底取材から生まれたクライムサスペンスは一級品の仕上がりとなつて、ジンダーや人種・世代・沖縄と本土・日本とアメリカなど、様々なフェンスをあぶり出し、それをどう越えて行くかを問いかけます。

社会派ドラマの傑作として大いに称え、放送人グランプリ優秀賞を贈ります。



## 「初選選理田」 菅野 高至（委員）

おめでとうございます。沖縄に関わるドラマを僕も若いときに一つだけ作ったことがあ

ります。遥か30年以上前のものはや記憶の彼方ですが、沖縄を描く難しさはくつきりと覚えていて。そして今回、20年以上WOWOWにお金を払い続けて、本当に良かったなと思うオリジナル脚本のドラマを見させていただきました。

表彰状には違った表現で書きましたけど、

この作品は一級品の、プロの脚本家、プロの演出家、プロのプロデューサーお二人、そしてプロの役者さんたちが成せる技の作品だと思います。



今テレビドラマはほとんど素人しか作っていないという状況の中で、なぜか地上波の放送局ではない、衛星放送の会社がプロの作品を作ったことの意味は大きいと思います。

個人的な願いで言えば、これがグランプリ大賞を取ればよかったのですが、制作に関わったみなさんに、僕は本当に感謝の言葉しかありません。もし、この企画のプロデューサーを僕がやったら、多分どこかで挫折したと思います。挫折しないで、最後までチームワークよく頑張つて作ってくれました。ありがとうございます。（拍手）

## 【受賞のふたけ】

WOWコンテンツ制作局ドラマ制作部

高江洲 義貴氏

この度はこのような栄えある賞をいただきありがとうございます。僕自身、沖縄県宜野湾市普天間で生まれ育ちまして、この仕事を始めていつか沖縄を題材にした作品をやりたいなと考えてつも、やはり沖縄が抱えているテーマや題材というのは複雑なものがあ、なかなか自分では作るにはまだまだちょっと時間がかかりそうだなと思っていました。



そんな時に、北野プロデューサーと縁があつて出会えまして、「高江洲さん、野木亜紀子さん脚本で、沖縄を題材にドラマを作りませんか」ということで、初めてそのお二人が作った企画書とプロットを読ませていただいた時に、沖縄が今抱えている現状、そこに生きる人々の気持ち、そういうものをエンターテイメントの力で世界に発信していこう、そういう覚悟といますか、同時に、すごく優しさも感じまして、プロデューサーというよりは、うちなーんちゅ、沖縄の人としてありがとうございます。思ったのを覚えています。

もう絶対これは世に出さなきゃいけないと思つてやつてまいりました。そしてこのよう

な素晴らしい賞をいただけて本当に感謝します。

松本監督初め沖縄ロケものすごく大変でしたが、スタッフキャスト一丸となつてこの作品に挑戦できて、こういう結果が出て嬉しく思っております。

ありがとうございます。（拍手）

## 【受賞のふたけ】

元・NHKエンタープライズ ドラマ部

現・フジテレビ ドラマ映画制作部

北野 拓氏

このドラマを企画した理由は、僕自身がNHKの新人時代に沖縄放送局で事件記者、警察担当の記者をしていて、そのときに米軍犯罪を間近で取材していたのですが、事件事故に遭つたけど、日本側が米軍側の加害者を裁くことが難しい状況であったり、性被害を受けているけど、政治的な状況に巻き込まれるので、被害者が訴えるのが難しいこともあったりして、当時、記者としてニュースでこうした沖縄の現実を伝えてもなかなか届かない現状があつたんで、こうした問題をいつかドラマにしたいといけないなと思つていました。



それで本土復帰50年を目指して、かなり前から脚本の野木亜紀子さんと準備したんですけど、こういうセンシティブな企画は自分の

力不足もあるんですけど、なかなか成立させることが難しくて。でも、やっぱりどうしても意地で、自分の妻も沖縄出身なんですけど、どこかで絶対成立させようと思つて、各社を回つて、本当に奇跡的な縁で高江洲さんにこの企画を拾ってもらつて、何とかWOWさんが制作費を出してくださつて成立した企画です。

クリエイティブに関しては、沖縄の地域性をあらゆる意味で突き詰めていくことが世界に届くのだと言つて、野木さんと取材して物語を考えていって、そのことを高江洲さんや松本監督はじめ、キャストの方々、沖縄の協力してくださつた方々にもお伝えして、皆さんがそれを信じて企画に参加してくださいました。実際に成立させていくのはとても大変でしたけど、すごく良いチームで、奇跡的なチームで、素晴らしい作品が完成して、プロデューサーとしては幸せでしたし、世に出せてほつとしてるという感じです。

この度は本当に素晴らしい賞をいただき、ありがとうございます。（拍手）

【受賞のふたけ】 松本 佳奈氏

ちよつと手短にお話させていただきます。完成してからもう一年半ぐらい経つんですけども、やっぱり未だにニュースを見ていると、沖縄の現状つて変わっていないくて、やっぱり沖縄について私達は知らないことがまだまだたくさんあつて、知ってる人も少ないっていう。

だから、こういう作品をきっかけに、少しでも多くの人に沖縄について知ってもらつて、考えるきっかけになつてもらえればいいなと思つています。この賞を機にさらに広がるこ

とを願っています。ありがとうございます。（拍手）

## ◇グランプリ 優秀賞◇ 連続テレビ小説「らんまん」

### ＜表彰状＞

NHK連続テレビ小説「らんまん」は、長田育恵の優れた脚本と神木隆之介、浜辺美波ら主要キャストの高い演技力、植物を丁寧に取り上げ番組に生命を与えたスタッフたち。阿部海太郎の品格を感じさせる音楽、あいみよんの心に残るテーマ曲など、すべてが幸福な出会いを果たし視聴者の心を掴んで放しませんでした。とりわけ主人公・榎野万太郎の植物への愛と「雑草という草はない」という思想が、早川逸馬の民主主義と響き合いながらブレることなく一貫して描かれ、名もない草である市井の人々にも等しく光を当てた点で、優れたドラマでした。毎朝視聴者の心を豊かにしてくれたことに敬意を表し、優秀賞を贈ります。

【祝辞 選理理由】 岡室 美奈子（委員）



「ご受賞、おめでとうございます。『らんまん』はNHK連続テレビ小説史上に名を刻む傑作朝ドラになったと思います。理由は先ほどの賞状に書かれていた通りなんですけれども、

主人公である榎野万太郎の「雑草という草はない」という思想が半年間の間、全くブレることなく一貫して描かれたところが大きな魅力でした。ブレブレの朝ドラも多いと思うんですねけれども、本当に素晴らしかったと思います。

とりわけ、榎野万太郎が名もなき草に名前をつけるという行為が、そのまま市井の名もなき人々に等しく光を当てる、ということにしっかりと繋がっていて、その意味で民主主義を体現するような骨太なドラマでもあったと思います。繊細で優しいだけではなくて骨太であるということにもぐつとききました。

脚本を書かれた長田（おさだ）育恵さんは演劇の世界では、もう既に数々の賞を受賞されて大変高く評価されている劇作家でいらつしやいますけれども、テレビドラマの脚本家としてはまだ新人と言ってもいい状態であつたと思います。それなのに、こんな素晴らしいドラマを書かれたということに大変感銘を受けました。長田さんを思い切つて起用された松川さんの御慧眼も素晴らしかったと思います。

主演の神木隆之介さんや浜辺美波さんはじめ、主要キャストの皆さんの本当に心のこもつた演技にも心を動かされました。大変、大きな共感を呼んだと思っております。植物を繊細に映し出すスタッフの皆様の素晴らしい技術、演出音楽全てが本当に素晴らしかったと思います。毎朝、私達の心を和ませてくれて、気持ちを豊かにしてくれる素晴らしい朝ドラであつたと思います。

一視聴者としても心からお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。そしておめでとーございます。（拍手）

## 【受賞のつば】 渡邊 良雄 氏

朝ドラ「らんまん」のチーフ演出を担当しました渡邊です。このような栄えある賞をいただいたこと、大変嬉しく思っております。

基地問題という固いテーマのドラマの次に「らんまん」はちよつと落差が激しいような気がしますけれども、僕らはよく先輩から、連続テレビ小説というのは「テレビ小説」って書いてある通り、新聞の朝刊に載っている連載小説を朝の15分間ドラマにして見せるようなものだ、ということをつつと言われ続けてきたようです。



しかし、最近ちよつと状況がいろいろ変わつてきて、昔のような作り方をすると、なつていうか手を抜いているんじゃないか、と言われがちなのがあります。演出する側としては常日頃から「どこを、どういうふう」に頑張つて、通常のプライムタイムや深夜ドラマのレベルのドラマをちゃんと作つて皆さんに提示できるのか」というのを考えなきゃいけないと思つてやっています。

僕は朝ドラのチーフ演出は3本目なんですけども、この「らんまん」をやるにあたって、いかに視聴者の皆さんの満足度を高めるか、

というところを頭の中に叩き込んでやつたつもりであります。

脚本の長田さんは演劇畑の方なので、非常にセリフとか会話の妙が、やはりすごく面白いところがありますので、朝ドラの中にそれをいかに上手いこと入れつつ、テレビドラマとしてどううまく落とし込むかを、演出としては一番考えた点であります。

先ほど名前が出ました石橋冠さん、大山勝美さん、皆さん局は違いますけど、僕は小さい頃にドラマを観て、「俺、こういうドラマ作りたいなー」と。「池中玄太80キロ」とか目テレさんのですね。僕、目テレさんの入社試験落ちましたけども……ああいうドラマを中学生ぐらいで見たか見ましてね、なんかこういうのをやりたいな、ホッコリするドラマをやりたいなと思つて、今ドラマの世界で30年ぐらいやつていますが、そういう皆さんの「放送人の会」から評価いただいたというのは、本当に光栄であります。

ありがとうございました。（拍手）

## 【受賞のつば】 長田 育恵 氏

脚本の長田育恵と申します。この度は本当に素晴らしい賞をいただき、ありがとうございました。



今、「紹介にありました通り、私はずっと演劇の脚本を書いてきました。それがコロナ禍に突入して、劇場で上演予定だったものが全て中止になつてしまひ、そのときにNHKが「時間ができたなら、テレビドラマを書いてみないか」と声をかけてくれて、特集ドラマ「流行感冒」という一作を書いたことがきっかけで、朝ドラを書くことが決まりました。

脚本家としてはとてもキャリアが浅く、連続ドラマも5回までしか書いたことがない状態で全130話の朝ドラを書かせていただくことが決まりまして、本当に、まず書く機会を与えてくださったことに深く感謝をしております。

それから書くにあたって、やはり、様々なことが押し寄せました。こんなにキャリアの浅い自分がこれほど長く続いた朝ドラを書いていいのかということ。舞台の方では多くの人が上演中止の煽りを食らつて収入の道も途絶える中で、自分ひとり、こちらに来ていいのかということ。それから、ドラマの内容面について、コロナ禍という真つ只中でお話をいただいたので、今この時に何を生み出せばいいのだろうと真剣に悩みました。

そして、そういう自分の皮膚感覚を全てひつくるめて、これが放映される頃にはきっとコロナ禍を越えた最初の春が来るだろうから、コロナ禍の中で分断された人たちが、もう一度、自分の名前や、やるべきこと、本来の元氣を取り戻せるようにと思ひを込めて、企画を提案しました。

こうしてこの「らんまん」という、すべての植物にはみんな名前があり、生きる力があつて、それぞれにいいところがあるんだ、というメッセージ性を持つドラマを書かせていただ

くことになりました。

そうした私の思いを、脚本家としてはキャリアが浅いのにも関わらず、松川さん始め渡邊良雄監督も信じてくださって、私の書いたものを最後まで貫き、作家としての仕事を全うさせてもらいました。

朝ドラを書いている2年間の間に、「欲」が湧いてきました。それまではどこか、私は演劇の世界で劇作家として活動しているのが本筋だから、「流行感冒」を書かせていただいたけれども、コロナ禍の一時期的ことに過ぎないかもしれないと思っていました。ですが、朝ドラに取り組む2年間の間に、私もテレビドラマを書いていきたいと口にしてもいいんじゃないか、と思うようになりました。登場人物を生み、ドラマを紡ぎ、メッセージをフィクションの力で広く多くの人に届けることは、舞台もテレビドラマも映画も何も変わらない。この本質自体を、朝ドラを通して——本当に不遜なんですけれども、朝ドラを通して学ばせていただきました。毎日が発見の日々でした。

今こうして放送人の会という、放送に携わる方々が顕彰してくださる場と呼んでいただいたことは、私にとっては特別なことです。外様だったのが、門を開いていただいて、迎え入れていただいたような、そういう気持ちで今おります。これからもテレビドラマ描きたいという思いを、正々堂々と、自分で言っていきたいと思うようになりました。

本当に栄えある賞をいただいて深く感謝しつつ、脚本家としてはまだまだこれからだと思っておりますので、これからも精一杯書いていきます。この先も、いろいろ指導、よろしく願います。頑張ります。本当にありがとうございます。（拍手）

## 【受賞のとき】 松川 博敬氏

プロデューサーの松川と申します。この度はこのような素晴らしい賞をいただき、大変ありがとうございます。長田さんがこの地獄のような朝ドラの脚本を書いた後に、まだテレビの脚本を書き続けたいと言っていただけことは大変嬉しく思います。

表彰の際にも贈賞理由のなかで言っていたんですけど、長田さんはじめ、神木隆之介さんなどたくさんの方が「幸福な出会い」を果たしたことで、視聴者に評価されたというコメントがあつたんですが、本当に私はこのコメントが嬉しくてありがとうございます。



プロデューサーの私がやったことは本当にそれだけで、いろんな才能を集めて、なんかそれがもう勝手に雪だるまのようにどんどんどんどん大きく大きく成長して、このような形で評価されたことが本当に嬉しくて、大変ありがたいと思っております。

今後誠実に作品と人と向き合って、番組作りをしていきたいと思っております。今日はどうもありがとうございます。（拍手）

## ◇グランプリ 優秀賞◇

### 「関東大震災から100年」

#### 112歳の証言と未来への提言

##### 〈表彰状〉

「関東大震災」は昨年で100年目を迎えました。番組は、この大地震を逗子で体験し112歳で、昨年亡くなった高嶋フジさんの貴重な証言を軸に、大地震の真の姿に迫ります。さらに首都直下地震への備えなどを、耐震基準の観点から専門家が提言します。

折しも放送翌日、能登半島で巨大地震が発生しました。地震や津波の猛威を何度も目の当たりにする私達は、その惨状にさえ慣れてしまい、それはやがて風化します。

番組は地震大国に生きる国民に、大規模災害に立ち向かう術を考えさせるきっかけとなりました。災害に対するラジオメディアの責務を示してくれたニッポン放送とスタッフを称えて、ここに放送人グランプリ優秀賞を贈ります。

##### 「授辞 贈賞理由」 三原 治（委員）

おめでとございます。ニッポン放送はこれまで災害ドキュメンタリーをきっちり作っています。東日本大震災の大川小学校をずっと追いかける番組など、数々のドキュメンタリーでいろんな賞を取っております。今回は、風化している「100年前の関東大震災」を伝えるラジオドキュメンタリーを見事に作り上げてくれました。

去年の大晦日の放送でしたが、今もYouTube、ポッドキャストで聞くことができます。ぜひ聞いてください、見事な作品です。112歳の高嶋フジさんが、112歳とは思えない情熱で訴えかけてきて、まさに心に伝わってきます。



ただ地味なんです。災害番組を派手には作れませんので地味で当たり前です。ニッポン放送は開局70年を迎え、いくつもの開局記念特別番組が作れましたが、この番組はその特別番組でもありません。来週金曜にギャラクシー賞の贈賞式がありますが、ニッポン放送からは、DJパーソナリティ賞に「オールドリー」が選ばれます。おめでとございます。華々しく派手でですね。

派手ではありませんが、私たち放送人グランプリは、地味にじっくり作り上げたこの作品に意義を感じて賞を贈ります。

ちよつと残念でもありますが、ラジオは震災や災害があるたびに見直されます。停電になったり、情報網が寸断されると、テレビやスマートフォンが使えなくなります。その点、ラジオは手回しで充電可能な災害用の製品があり、また乾電池でも聞けるので、災害のときには本当に役に立ちます。情報だけではなく、被災した人たちの心を和ませるような番組も聞いて貰えます。

ラジオは災害と非常に密接な関係がある理由の一つに、この関東大震災がきっかけでラジオが広く普及します。それは関東大震災で流言デマが拡散したという教訓から、ラジオを広めなきゃいけないとなったのです。放送

100年の原点でもあります。

番組で「鎌倉の方なんですけども、『地震がある』と地割れをするから、地震があったら、海岸へ、浜へ逃げなさい」という誤った情報を信じて被災に遭った」という話が出てきます。

人々は、そう思い込まれていたんでしょね。災害と情報とは？…この番組の意義は大きなものがありました

これからも私達の生活に欠かせない、ラジオの地道な番組作りをお願いいたします。おめでとございませう。(拍手)

## 【音のよけ】

ニッポン放送コンテンツプランニング局  
放送スポーツセンター 解説委員

遠藤 竜也氏



ニッポン放送の遠藤竜也と申します。今日は会社で最も地味な三人が壇上に上がっております。(笑) 本当に地味なテーマだと思います。ニッポン放送を聴いて頂いている方はご存知かと思いますが、ニッポン放送では「オールナイトニッポン」がその1で、その2は「ショウアップナイター」です、この二つの全国ネットの番組がメインという中で、今回、放

送人のための放送人の賞をいただけたのは、ラジオの報道も頑張っているなどお褒めをいただいて、ラジオは私どもの作品だけでしたので、より今後、頑張っていかなければならないなと思っております。

去年(2011)が関東大震災から100年だったわけですが、2年くらい前に、藤原高峰とともに関東の放送局である以上、やはり関東大震災からは逃れられない、とにかく何か一つ作っていかねばならない、と考えました。結果これはドキュメンタリーという形になりましたが、最初、何を作ろうか、どういうテーマでやろうかという話をしている中で、藤原が、当時110歳だった高嶋フジさんを見つけてきて、15分ほどのインタビューをポッドキャストで流しました。それを僕が聴いて、「これこそ、先人の知恵と伝承だ」という意味も込めて、やはりドキュメンタリーにしようという話を藤原にしました。



フジさんのお声は、お聴き頂きましたように、110歳112歳の声と思えない張りのある気持ちのこもった声でした。主役の高嶋フジさんには、残念ながら昨年お亡くなりになりましたけれども、本当にありがとございましてとお伝えしたいと思っております。

今、委員の方からありましたけれども、まさか、その放送を終えて24時間以内に能登半島で地震があるなどとは思いませんでした。

たし、それによって「防災の時にラジオだ」とまた見直していただけたということも、この番組を作ってきた甲斐があったと思っております。

まさにドキュメンタリーの中にあつたんですが、「地震は今も起きる。この瞬間にも起きるかもしれません。昔も起きた。これから起きるかもしれない」と。そう考えて、能登地震が翌日あつたわけですが、我々も引き続きこういう形の啓蒙活動なども踏まえて、「ニッポン放送は防災」という立場できつちり仕事をしたいかなければならないと改めて思った次第でございます。

いずれにしても、首都直下型地震は今後30年のうちに70%の確率で起きるといった話もございませう。これからも日々鍛錬をしながら、先ほどから皆さん若手を育てるとおっしゃっていただいています。ラジオ局も若手自体はいるのはいます。ただ、報道とかスポーツの現場に、なかなか人が割けない状況にあるというところで、我々がまず一生懸命やりながら、いかに下に伝えていくのか、いかに育てていくのかも、一ラジオ局の使命だと思っております。

今後とも、よろしく願います。(拍手)

## 【音のよけ】

ニッポン放送コンテンツプランニング局  
放送スポーツセンター 担当副部長

藤原 高峰氏

ニッポン放送の藤原高峰でございます。普段は警視庁のキャップとして社会ネタを中心に現場の記者をやりつつ、ニュースデスクもやったり、あとこういった報道ドキュメンタ

リー番組の制作に関わったりしております。3年ほど前から、二〇一三年が関東大震災から100年になるというのも分かっておりまして、当時のことを証言できる方を探して、それを音声にしてニッポン放送の宝として残していきたい、とずっと思っていました。いろいろ調べていくうちに、2年前に縁あつて高嶋フジさん(旧姓・平井フジさん)に出会うことができました。当時111歳だったフジさんは横浜市内のグループホームに生活していましたが、非常に明るく元気で、声もしっかりしていましたし、100年前の巨大地震を12歳で被災されたその記憶を一日も忘れることなく覚えていくという方でした。その方にお会いして、何度もグループホームに通いました。また、この番組に出たいいただいた取材対象者、逗子の方とか追浜の方にも足繁く通って、何度もお話を伺いました。



そうして出来たのがこの番組でした。今回、このような栄えある賞を受賞できたことについては、天国に行かれた高嶋フジさん、フジさんが津波から必死に守り抜いた当時2歳の弟・平井末吉(すえきち)さんも、天国で喜んでるんじゃないかなと思います。

そして、末吉さんの息子の平井光義さんがフジさんが亡くなる最期までお世話をされていたんですが、その平井さんと5月14日にお

墓参りをして、「放送人グランプリ2024」で優秀賞を取ったという報告をして来ました。

平井さんには「フジの証言はニッポン放送さん、藤原さんに託しますので、ぜひ大きな地震が起こるたびに、この証言を多くの方に聞いていただけるようにして貰いたい」と言われております。今後また大きな地震とか災害が起きることが予想されますが、そのたびにフジさんのことを思い出しながら、この貴重な証言を使って、より多くの方に減災などの防災意識を高める啓蒙活動をやっていければと思います。

本当に今回はありがとうございました。

(拍手)

## 【受賞の喜び】

パーソナリティ 上柳 昌彦氏



この作品の制作者 ニッポン放送の遠藤さんによりますと「地味な3人」とのことですが、申し訳ございません、私20年ほど前にギヤラクシー賞のDJパーソナリティ賞を貰っちゃっています。(笑い) すいません、上柳昌彦(うえやなぎ まさひこ)と申します。

僕がニッポン放送に入社した一九八一年には東海地震がいつ起こってもおかしくないというところで、ずいぶん地震の研修を受けました。まだ「南海トラフ地震」という言葉にもな

じみがなかった頃です。そして阪神淡路大震災が起こりました。神戸の辺りは私の父と母の故郷で、私は震災の4日後に入りました。当時、須磨にあったラジオ関西はその建物の躯体に全部ヒビが入って、今にも崩れそうな中でずっと放送を行っている姿を見たり、須磨は報道陣もあまり入っていないかったのですが、学校の体育館は崩れたり、建物もそこで倒壊しているという中で、瓦礫で車も通れませんでした。交差点の真ん中にテーブルを出して小さな携帯ラジオをその上に置いて、周辺住民のみなさんがラジオを取り囲むようにして情報を入手している姿を見かけたのです。

私たちラジオ屋は、こういうときに何を伝えるべきなのかを考えさせられた忘れられない光景です。

そして今度は東日本大震災です。金曜日の午後、私は有楽町でちょうど生放送中でした。東北の方々の震度6強とか7の揺れではないのですが、震度5強の地震の中での生放送を体験しました。YouTubeでも未だに流れています。ただただ声がうわずるのを何とか抑えるという放送でした。いよいよ首都直下型地震かと思ったら予想外の東北地方の大津波を伴う大地震でした。

このあと特別功労賞を受賞されます浜村淳さんのように長きにわたってラジオパーソナリティを私がやるかわかりませんが、いつか地震などの大きな災害に直面する瞬間が来たら、「お前は、その時に何ができるのか？何を発信できるのか？」ということを経回自分自身に問いながら、朝の生放送をやらせていただいています。

高嶋フジさんが100年前に関東大震災を体験されたのは、小坪という小さな漁港です。逗

子の近くで、小坪マリーナにはプールがあり私も若い頃よく行きましたが、小坪で関東大震災の被害があったことなどまったく知らなかったのです。

関東大震災というやはり浅草や日比谷、また横浜の被害などが映像に残っていますが、小田原や逗子の小坪の辺りにも大変な被害が出ていたことを高嶋さんの証言で知ることになりました。

そういうところが学ばせていただき、また学んだことを自分がどうやって放送に返すことが出来るのかを真剣に考えながら、また来週からの生放送に臨みたいと思います。

余談ですが、テレビドラマも大好きで、「らんまん」はずっと観ていました。牧野富太郎さんの植物園を訪ねてみたくて去年の夏は高知を旅しました。植物園の全ての植物に小さなプレートで名前が書いてあるのを見て、牧野さんの「雑草という名の草はない」という言葉は本当だったんだと感動し、彼が描いた植物図鑑も拝見することができて、本当によいドラマを作って下さったと改めて思いました。そして今回賞もとられたので本当に僕も嬉しかったです。以上、ラジオ屋からのテレビドラマの感想でございます。

早朝4時半から6時という、とてもない時間で番組をやっています。1時15分に起きていますが、やはりラジオは楽しいです。深夜放送と朝のワイド番組の両方を担当しているみたいな状況でもう9年目に入っています。よろしければ、ニッポン放送の早朝番組をラジオなども駆使して聴いて頂ければ幸いです。今日は本当にありがとうございました。

(拍手)

## ◇グランプリ 特別功労賞◇ 松尾 羊一



＜表彰状＞ あなたは文化放送で社会教養番組のディレクターとして活躍したのち、放送評論家としてアカデミックな高みからではなく、終始一貫生活者の視点でラジオ・テレビを論じ、多くのコラムの連載で知られました。その内容は日々の番組から日本人を論じ、風俗・世情を読み解く、いわばメディア社会論です。

30年前に言われた「テレビは読むもの、分析的に批評するものであり、結果それは放送局への提言になる。テレビを作るのは見ている我々なのだから」という言葉は、今なお視聴者と放送局との良き関係を言い当てています。日本のラジオ・テレビを信じ続け、常に周囲の後輩に温かいまなざしを向けてくれたあなたに感謝し、放送人グランプリ特別功労賞を贈ります。

【祝辞選理理由】 渡辺 紘史(委員長)

またも私で恐縮です。大先輩がここで話す

予定だったんですけど、遠慮されまして、表彰状の文案を書いた私にお鉢が回ってきました。私は個人的な思い出だけ、二つ述べさせていただきます。

一九八九年、私が当時ドラマのプロデューサーをやっておりまして、「徳島テレビ祭」(第4回)に呼ばれてまして映画評論家であった白井佳夫さんと松尾羊一さんに、私が制作していた「青春家族」という連続テレビ小説を褒めていただきました。初めてですから、大変感激した記憶があります。

それが松尾さんとの最初の出会いで、その数年後、私はドラマの現場を離れていましたが、93年に、松尾さんは『テレビのなかの家族』(ブックレット生くる⑨)という本を書かれて、連続テレビ小説で、団塊の世代の夫婦と娘の家族漂流を描いた「青春家族」を引いて、戦後日本の家族論などを展開されたんです。それは制作者の私が分析するよりも、鋭い分析と適格な紹介をしてくれて、さすが評論家非常に感動した覚えがありました。ちなみに、その本の最後に書いてあったのが先ほど、表彰状の中にある「テレビを読む」というくだりだと記憶しています。

もう一つは、時が下がりまして私が放送人の会に入った後のことです。

「日韓中テレビ制作者フォーラム」には、通称「松尾バー」というのがありました。日韓中テレビ制作者フォーラムというのは、日本と韓国と中国の三国の放送人たちが一堂に会して、各国の番組を見ながら語り合うという国際フォーラムです。各国、持ち回りでやりまして、一つの国の一つのホテルで会宿みたいにやるわけです。いつしか日本の参加者たちが、松尾さんの部屋に集まって情報交換と称して

「飲み会」が始まりまして、それをいつしか「松尾バー」というようになったんですね。松尾さんがフォーラムに参加されなくなつたあとも、代々、その「バー」は引き継がれていきます。

私が長年にわたり、日韓中テレビ制作者フォーラムの裏方の世話役を続けられたのは、フォーラムの使命感というよりも、「松尾バー」で全国の放送人たちと一緒に飲めるから、というのが動機でした。松尾さんはいつも皆の中心にいて、あの軽妙洒落な話し方で、我々に「テレビを読む」とつていうのはこういうことなんだというような話をされておられました。これは極めて印象的でありました。

「放送人の会」創始者の一人であつた松尾さんは放送人句会の創始者でもありました。馬が笑う「馬笑(ばしょう)」と称して、「松尾馬笑」と洒落ておりました。松尾さんの名句の数々、会報(30頁)に掲載されていますので、どうぞ、ご鑑賞ください。

ということで講評にも何なりませんけれども、どうも、おめでとございしました。(拍手)

#### 【松尾のJTB】

松尾羊一氏 代理 吉村 太郎氏

本日は松尾羊一の代理で来ました、長男の吉村太郎と申します。残念ながら、今、紹介にありましたように父は、今年の2月22日に大腸がんで亡くなりました。94歳でした。

この度は父の為にこのような栄誉ある賞をいただきました誠にありがとうございます。

いま、このようにビデオでは饒舌に喋っていますが、それとは対照的に家では大変物静か

で一日中テレビを見ていて、あらゆる番組のザッピングをしたり、録画で溜めたビデオを見ていたり、インプットに徹している感じでした。



就職して実家を離れた後、時々実家に帰ってもそんな感じでしたから、二〇一五年にギャラクシー賞志賀信夫賞を受賞したのもずっと後になってから知った次第で、仕事については多くを語りませんでした。

それでも、私が学生の頃はチャンネル権が父にありましたので、ソファで一緒に当時のドラマを見たりして、お互いに感想を言い合うことはよくありました。後で活字になった父の原稿を読むと「かなり盛られた」私のコメントも載っていたことがありました。

ネットのない時代でしたから、父は地図を広げたり、辞典を引いたり、メモを取りながら、熱心に画面に向き合っていた姿が印象的でした。

昨年の春から体調を崩し、12月には家では介護できなくなり、近所のホスピス施設に入りました。そこでも、亡くなる前日まで新聞に目を通して気になるテレビ欄の番組に蛍光灯ペンでマーキングをしていました。

実際に見ていたかは定かではありませんが、最期まで放送批評という仕事をライフワーク

としてやり遂げたことに家族としても誇りに思います。

今日こうして皆さんにお目にかかれて、生前の活動の様子を聞いて、松尾羊一の仕事、すごかったんだ。親父、結構やるんだって改めて実感しました。

命日の2月22日は猫の日なんですね。生前、猫を大変可愛がっていたので、もしかしたら、この日を選んだのでしょうか…。その日はやけにたくさん朝食を食べたそうです。そして、歯を磨いて磨き終わった後に静かに息を引き取ったそうです。ですから苦しまずに逝ったことは良かったなと思っています。

放送人の会はじめ、親しくさせていただいた皆様、本当にお世話になりました。皆様に囲まれて幸せな人生だったと思います。また猫の日が来たら松尾羊一の命日だと思い出していたければ幸いです。

どうもありがとうございます。(拍手)

#### ◆グランプリ 特別功労賞◆

浜村 淳



## へ表彰状

半世紀にわたる朝ワイドのラジオ番組「ありがとう浜村淳です」が、今年3月で平日の放送を終了し、土曜朝だけの放送となりました。

午前8時から平日2時間、土曜日は3時間半、新聞・週刊誌・ラジオテレビ・映画情報などを伝え続けてきた浜村節は、難しい言葉を使わず、分かりやすく話す口調と相まって長く関西で親しまれてきました。

映画評論家としても知られ、見どころやあらすじを講談調で語り、人物の衣装や景色まで細かく描写する様は「本編より面白い」と評されています。

ラジオを愛して50年、関西のレジェンド・浜村さんのこれまでの功労を顕彰し特別功労賞を贈ります

## 【辞選理由】 長井 展光（委員）

「さて皆さん」、関西でこれ喋ると、今以上に湧くのですけど（笑）、さすがにここは東京都千代田区紀尾井町1丁目1番地、東京のど真ん中ですから、今ぐらいたったのかなと思います。



さて皆さん、50年も番組を続けるというのは本当に大変なことだと思います、それが本当にウィークデーの2時間だけでなく土曜も放送する。しかもずっと休まずに続けるというのは、本当に素晴らしいことだと思います

す。それはご本人が切磋琢磨されてきたところだと思います。病気でほんのちよつとだけお休みされたことはありますが、コロナの間も、さすがにもうお年を召していらっしゃるから、これは無理かなと思っていたのですが、自宅に回線を引くことができ、ご自宅からずっと放送を続けられたというように、ものすごく放送を大切にしてこられた方です。

その昔、この番組は毎日、「花と緑と愛の千里丘（せんりおか）」という言葉から始まって、浜村さん自身も千里丘近くに住んでおられましたが、会社が梅田に引っ越したら、お家も会社の近くに引っ越してきて、「自分の仕事はこれなんや」という強い意志と意識を示されました。

優しい言葉で伝えることが第一で、浜村節と言われる柔らかい言葉で、講談調も含め、いろんなことを伝えるのが、多くの関西のリスナーの心を惹きつけたと思います。ただ、よく言われるのは浜村さんの解説を聞いて面白そうな映画やなど、実際、映画館に見に行ったら、全然面白く無かった、浜村さんの解説だけの方が良かったという（笑）、そんな声も頂戴しました。

今日は、土曜日だけになりましたがラジオの生放送があるので、お出でいただけなかったのが非常に残念なのですが、浜村さん、昭和10年の生まれです。来年になりますといよいよ90歳です。ご本人は100歳までやり抜くということをずっとずっと言い続けていらっしゃいます。今日はMBSラジオ東京支社長の熊野さんにお出でいただきましたけども、番組を支えてくださった多くの皆さんがあつての番組パーソナリティーだと思います。これから後100歳、100歳と言わず、「関東大震災」の

証言で113歳でちゃんとラジオのインタビューに答えてらっしゃる方もいる訳ですから、未永く、またスタッフの皆さんにも支えられていきながら番組を続けていただきたい、そういう思いを込めて特別功労賞を送らせていただきましたと思います。

未永く、未永く、皆さんに愛される浜村さんであつてほしいと思います。（拍手）

## 受賞のうけ

MBSラジオ東京支社長 熊野 隆文氏

ありがとうございます。代理で今日、こちらにきました熊野と申します。

実はですね一九七四年の4月からこの番組が始まりまして、その当時私は8歳でした。小学校2年生ぐらいだったと思うんですが、毎朝毎朝流れるこのテーマソングが嫌で嫌でもう本当に憂鬱な番組で、毎朝流されてもう嫌だ嫌だと思っていましたところ、何の縁かわかりませんが毎日放送に入社しまして、この50周年で節目を迎えて平日の放送を終えるところまで関わることになってしまいました。



いや、今となつては大変光栄に思っております。ありがとうございます。

それでは、浜村さんのメッセージを、どうぞお聞きください。（拍手）

## 【賞のうけ】 浜村 淳氏

この度は、大変栄誉のある賞を頂戴いたしました。誠にありがとうございます。昭和48年に始めまして一生懸命明るく楽しく面白く聞いて良かった、そう思ってもらえるラジオ番組、一生懸命頑張らして、はつと気がついたら50年も経っていたんです。

誠にありがとうございます。たくさんの方々に支えていただきました。お迎えしたゲストも延べ1万何千人を超えております。その中にはアランドロンも来てくれました。ソフィアローレンも来てくれました。石原裕次郎さんも来てくれました。そして、お互いラジオのために頑張ろうとそういう話をいたしました。アランドロンと僕は同い年なんです、二人の雑談で、ラジオを主人公に持つてきて、南米チリが舞台のアジエンデ大統領を主人公にした「サンチャゴに雨が降る」のような映画を作りたいという話も出ました。

そうして50年、頑張つてまいりました。今後ともいろんな面において、たくさんの方々の支えをいただいて、ますます頑張っていきたいと思っています。

私は50年目に一番笑いましたのは、私がこの番組始めたときに生まれた赤ちゃんが、今この番組のチーフプロデューサーになっております。まあ、月日の流れというものは、かりそめではない、それだけ無駄にはしたくないと思いました。

今後とも頑張ります。よろしくお願ひします。（拍手）

## 表彰状 放送人クラブプリ大賞

NHKスペシャル・E-TV特集

### 「冤罪」の深層 シリーズ

取材・制作チーム 殿

この番組は、軍事転用可能な機械を中国に不正輸出したとして民間企業の3人が逮捕・起訴された事件が、実は警視庁公安部によるでっち上げであつたという事実を、内部告発文書から解きほぐし、新たな資料や証言によって冤罪の深層に迫りました。

法令の解釈や定義をめぐって争う経産省や検察とのやりとり、調書の書き換えや隠ぺい示す証言など、地道な取材を通じて公安の闇に迫った番組チームとともに、裁判の推移や被告とされた人たちの動きに合わせ、3つの番組をタイムリーに編成したNHKスペシャル E-TV特集事務局の仕事も称え、ここに放送人グランプリ大賞を贈ります。

二〇二四年五月二十五日

一般財団法人 放送人の会

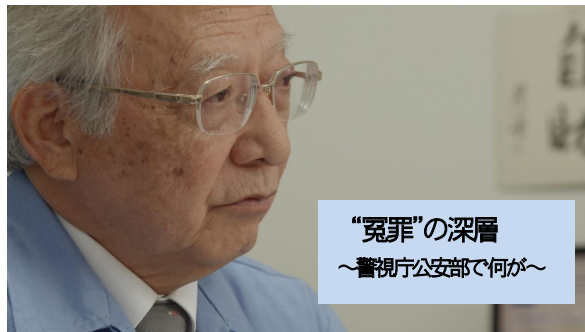
会長 今野 勉

### 【祝辞 謝辞理由】 渡辺 紘史 (委員長)

おめでとございしました。贈賞理由は賞状の中で述べた通りなんですが、私はこの番組の成功はタイトルに、まことの相「真相」ではなく、「深い層」つまり、闇の後ろに隠れた醜状のように溜まったもの(社会的、心理的要因)を「深層」と言いますが、番組に、このタイトルをつけ得たことだと思っています。

「真相」を超えて「深層」にたどれると踏んだのは、多分 標的にされた小河原加工機の会

社に届いた内部告発の手紙を発見した時からだと思いますが、期待にたがわず、警察の捜査よりもより上回る捜査力というか、徹底した取材力と綿密なる構成員を以て深い層を掘ることが出来て、タイトルの名に恥じない内容の作品になったのだと思うのです。

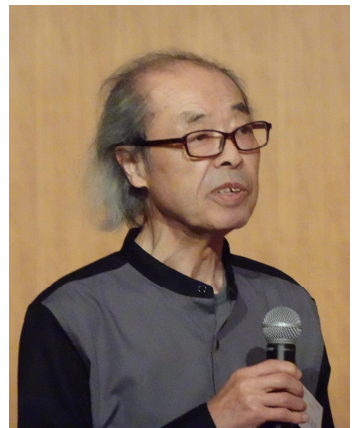


“冤罪”の深層  
～警視庁公安部で何が～

それから、今の日本人は、みんなモヤモヤしているんですね。何事も真相がはつきりしない。隠されちゃう。特に政治案件はみなそうです…喋る人は逃げちゃうし、メディアもなかなか踏み込めない、ヘジテートしちゃう、証言に出てきてもすぐ忘れちゃう、記憶をなくしちゃう。日本人が今、抱えている「何もちゃんとしたことが分からないじゃないか?」、「偉い人がみんな隠しているんじゃないか?」というような非常にモヤモヤしている気分、この番組は十分こたえ得たのではないかな。

冒頭の全体の選挙経過の中でも言いましたけども、現実というものに対してきちんと向き合って、今の人が抱えている気分をきちっと向き合って、そういう人たちが快哉を叫ぶ

ぐらいのものを与えたというのが、この番組が評価を得たことではないかと思っています。



メディアの捜査力をもつて、本当は政治の問題まで迫り着ければいいんですけどね。記者クラブ制度の中にある政治部の存在とかがあつて、深層まで迫り着けないようですが、ぜひ皆さん頑張つて、権力の監視役としてのメディアの役割を十分発揮してもらつて、これからも、さすがNHKのドキュメンタリーといわれる、たくさん良い作品を作つてほしいと思います。

皆さん、おめでとございしました。(拍手)

### 【受賞の言葉】

ディレクター 石原 大史氏

この度は栄えある賞をいただきまして誠にありがとうございます。

ドキュメンタリー番組の制作は、たくさん人の力を借りないとできません。今回の番組に関して言いますと、出演された大川原化工機の皆さん、お名前は出すことはできないのですが当局各所におられる告発者の皆さん、その力があつて初めてできた番組だと思えます。

大川原化工機の皆さんは、冤罪という巨大な暴力の前で、それに負けることなく声を上げ続けていらつしやいます。各所にいる名前

を出せない方々も自分のキャリアなり人生なりをかけて我々に協力してくれました。



この事件は、東京地裁の判決は会社側の勝訴となりました。その後、国と東京都が控訴し、会社側もそれに応じて控訴、間もなく東京高裁で審理が始まることになっています。

私達も引き続き取材をやっていきたいと思っています。この度はどうもありがとうございました。(拍手)

### 【賞の言葉】

社会部記者 影山 遥平氏

この度は賞いただきましてありがとうございます。NHKの報道局社会部で記者をしております影山と申します。石原ディレクターには番組の統括取材も含めてやっていただいたんですが、自分は普段日々の事件事故を初めとしたニュースを追う部署におりますので、ドキュメンタリーを主に扱う石原ディレクターと仕事すること自体がかなり珍しいことだったと思います。

そうした中で、警視庁の公安部という部署の取材を担当しておりましたので、警察当局と取材制作で向き合う中でいろいろ難しいことも多々ありました。さつき映像の中にもちらつとあつたんですが、装置の捜査担当者に

取りに行くときに、やはり記者クラブという  
ある意味、権力に一番近いところにいる記者  
として権力の側に行くことが自体も非常  
に大切だと思ひまして、そういう素朴な気持  
ちで取材を続けて参りました。



石原ディレクターも言った通りまだ公判が  
進んでいる中でもありますので、今後の推移  
しつかりと引き続きフォローして取材を続け  
ていきたいと考えております。

ありがとうございます。(拍手)

## 【受賞のうたげ】

社会部記者 牧野 大輝氏

NHK社会部で記者をしています、牧野と申  
します。今回、このような賞を下さりありがと  
うございました。私も影山と同様、普段は事件  
とか国税を取材する当局担当の記者をしてい  
まして、やはり当局担当の記者というのは各  
社、特ダネとかスクープを取るために日々、競  
争取材合戦をしてるんですけども、やはり取  
材をしている中で、当局がある程度意図を持  
ってリークしているという独自というもある  
んですね。

一方で、今回のような公安部の一審監視庁  
が知られたくない、世の中に出したくないと  
いうのを、私達が深く取材して表に出す、世の

中に出すというのが記者に求められる仕事だ  
と私は思っています。



今日、来てないんですけど、ディレクターの  
矢内(やうち)くんは、初めは全く警察の朝駆  
け夜回りという、当局への取材も全くやった  
ことがなかったのが、途中からはもう僕たち  
記者がびつくりするぐらい当局への取材にす  
ごい熱心でして、僕らが驚くような情報を取  
つてきて、やはり記者とディレクターが一緒  
に共同協力して、当局が隠している情報とか、  
世の中に出さないと駄目な情報をチームプレ  
ーで取材するという大切さを学びました。そ  
して、報道放送の力を今回、感じることでき  
きました。

このような賞をくださった、本当にありがと  
うございました。(拍手)

## 【受賞のうたげ】

ディレクター 矢内 智大氏

このような名誉ある賞をいただき、大変嬉  
しく思います。当初は、ここまで事件の深層に  
迫れるとは正直思っておらず、まさに暗中模  
索の心持ちでした。目の前には謎が山積み。糸  
口はわずか。そして一つ解明したとて、そのま  
た先にはさらなる謎...という具合でした。当  
時、石原ディレクターに言われていた「真実に

近づくための取材をよろしく」とという言葉  
思い出します。真実に近づくための取材とは  
何か。考えても分からなかった私にできたの  
は、とにかく足を動かすことだけでした。炎天  
下の東京を這い回す中、心折れかけた瞬間も  
ありましたが、今は諦めなくてよかったと胸  
を張りたいと思います。

最後にこの場を借りて、いつも暖かく取材  
にご協力くださった相嶋静夫さんのご遺族の  
皆様、大川原化工機の皆様に篤く感謝を申し  
上げます。

(拍手)

## お礼のうたげ

今野 勉 会長



放送人グランプリが終わりまして、今年も  
また、自分たちと同じ放送人の仲間が、いい仕  
事したなというのを教えていただきました。  
この会はそのすぐたくさんの方が見るわ  
けじゃないんですけど、実際に放送の現場、制

作・編成も含めて、現場にいた人間たちが、今  
同じ仲間たちがどういう番組を作っているの  
か、それを見て、良い番組作っている仲間たち  
をお呼びして話をしたいというのが真意であ  
ります。

今年もまた、我々の仲間はいいい仕事をして  
いるなど、改めて感じ入りました。

この後のパーティーでいろいろお話を伺い  
たいと思います。今日は、本当にありがとうございます。  
(拍手)

\*\*\*

## バック・イン・ミュージック考察

二原 治

「バック・イン・ミュージック」とは、TB  
SラジオをキーステーションにJRN各局で、  
一九六七(昭和四二)年七月三十一日から一九八二  
(昭和五七)年七月三十一日まで、15年間放送さ  
れました。

放送開始時は、タレントの男女ペアによる  
生放送の喋りのプロフェッショナルにこだわ  
りました。有名な野沢那智さんと白石冬美さ  
んによる「ナチチャコバック」は、その名残り  
です。

初代には、増田貴光さんと戸川昌子さん、八  
城一夫さんとやまのべもとこさん、野沢那智  
さんと白石冬美さん、なべおさみさんと星加  
ルミ子さん、矢島正明さんと今井とも子さん  
などタレント性を意識した個性豊かな顔ぶれ  
で、その後は、福田一郎さん、北山修さん、永  
六輔さんなど、文化人タイプが並びました。

日によって、番組のイメージがまるで違っ  
ており、幅広いリスナー層に支持されました。  
福田一郎さんはニュー・ロック層 八木誠さん

はポップス層、北山修さんは日本のフォークやロック層、ナチチャココンビは、浪人生・受験生のファン層を獲得していました。

さらに、69年から74年まで3時以降を若手局アナの生放送に切り替え、榊井論平さん、久米宏さん、林美雄さんなどが登場し、小島一慶さんは一部で初登場という出世コースを歩みました。

他の深夜放送に比べ、ちよつと硬派で、トーク路線を戦術として、フォーラム(集会広場)的なニュアンスを強調しつつ、大人の雰囲気を感じさせたのが「バック」でした。

あの頃、ラジオの深夜放送が楽しみでした。トランジスタラジオから流れてくる音楽にリズムを取りながら、受験勉強に臨んでいました。ラジオの周波数をおなじみの局にあわせて、そこから流れてくる新鮮な若者文化が、次々に生まれてきました。

特に70年代は、数々のヒット曲が誕生し、ラジオから生まれたサウンドに心躍らせました。若者たちが社会と向き合い、問題を共有する場でもありました。あの熱く輝いていた青春時代。深夜放送は、若者の解放された広場だったのです。

(日本大学芸術学部非常勤講師)

公開トークショー

第17回 人気番組メモリー

バック・イン・ミュージック

(TBSラジオ…67年～82年、深夜放送)  
日時…24年4月29日(月・祝)

13時30分～15時30分

会場…情文ホール(横浜情報文化センター6階)



ゲスト…きたやま おさむ

69年の3月から71年9月まで、

木曜バック水曜日深夜を担当。

(精神科医、元フオーククルセダース)

小室 等

74年4月から75年9月まで、

木曜バック水曜日深夜を担当。

(フオークシンガー、作曲家)

司会…鈴木 順(元TBSアナウンサー)、

外山豊雄(TBSアナウンサー)

主催…(二社)放送人の会

(公財)放送番組センター

企画…田中秋夫 構成…三原治 映像編集

&送出…深尾隆 演出…木原毅一

~~~~~

鈴木 當時は各局で深夜放送が綺羅星のごとくありました。ニッポン放送『オールナイトニッポン』(67年10月2日～現在、文化放送『セイ・ヤング』(69年6月～81年9月)では土居まさるさんが「やーやー」とか言っていました。

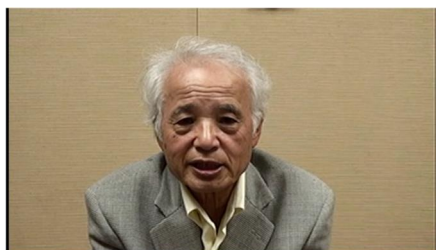
そしてTBSは67年7月に放送を始めたのが『バック』だったんです。番組の企画意図を、立ち上げ時のディレクター6人の中のお一人 熊沢敦<sup>※</sup>さんが「放送人の証言」で語っ

ています。

「バック」は妖精

【放送人の証言】より

熊沢 自分がこれだと思う、それぞれ特徴のある人を連れてきて、どんなことをやろうかも含めて、(ディレクター)6人各様に作ろうよ、というのがスタートラインですね。



熊沢 敦 氏

「放送人の証言」より

収録日：2012年5月22日

これは武本宏一<sup>※</sup>さんの発案なんだけど、繋ぎ役に「バック(Bug)」という、いわゆるシェイクスピアの妖精が番組にチャラッと出てはチャラッと消える、まさに妖精の役割で、オーブニングにちよつと出てきて、それから真ん中で、これからクイズをやるよというときにバックがちよつと出てきてとね。それが『バック』の名前の由来です。<sup>※</sup>

その頃、ちよつど「JALパック」が結構盛んで、『バック・イン・ミュージック』の「バック」は、もう殆どの人が「JALパック」の「バック」を連想したというのが、事実はそのじやない。でも、そんなことはいちいち番組で説明もしないんだ、そんなスタッフでしたよ。

※1 (くまざわあつし) 1988年生まれ、

東大英文科卒62年入社。

※2 (たけもとこういち) 1985年生まれ、東大英文科卒、61年入社。故人。

※3 妖精の声を『サウンドステッカー』にして毎晩登場させる。「僕はバックだ。時計の針が真夜中を刻むと、君の瞳は(略)」声は喜多道枝(1985年3月)。

鈴木 番組が始まった67年という時代と、深夜放送のターゲットについて、また熊沢さんの証言を聞いてみましょう。

子ども部屋に、ラジオの深夜放送を

【放送人の証言】より

熊沢 ちよつど団塊の世代が転居を迎えていた時代で、お父さんの書斎はないが、狭い家ながら子供にはちゃんと勉強部屋を与える。

そして、飯を食ったらテレビなんか見てないで、自分の部屋に行つて勉強をしなさいと言う、(略)トランジスタラジオも普及して比較的安く手に入つて、だいたいラジオは勉強部屋にある。だから、我々の一つの主戦場は子供の部屋、若い人たちの勉強部屋だった。

『バック』を始めるときに、ターゲットはそこだろうということで、「若い人たち向けにいい番組を作る」という議論をしてスタートになったと思います。

鈴木 北山さん小室さんは、熊沢ディレクターについて何か印象とか、仕事の上でこうだったみたいなお話は？

きたやま (舞台のスクリーン、熊沢氏の写真を見ながら) 印象がずいぶん、変わられたんじゃないかなって(笑い)……めんなさいね、55年ぶりになります。……お世話になったなつて思っているんです。

鈴木 あの時代、若者はテレビやラジオをどう捉えていたのか？ 熊沢さんの証言です。

## 若い人たちこそ ラジオ!

【放送人の証言】より

熊沢…その頃のテレビと今のテレビの一番の違いは、昭和40（65）年頃のテレビは若い人に全然向いていなかったんです。夜のゴールデン帯を越えても、大人中心というかアダルト中心で、20歳以上しかターゲットにしていなかった。

10代は全く意識しない作りだったと思います。だから、若い人たちがその頃のテレビと感覚的に全然ビタツと合っていないくてね、ラジオでビートルズの音楽を聞き、フォークソングが流れ出す…。フォークソングはテレビに出てないからね。若い人たちの嗜好にあう番組がテレビには、 wasn't.

だから、ラジオはそこに付け込める、つけ込めるっていうのはおかしいけど、「若い人たちはラジオ！」そういう分析がありました。

### 小室パッツンは手弁当?!

鈴木 小室さん あの時代、どういう方が聞いているのか、手心えなどは…。

小室 『バック』は、ほとんど全く認識していないの。まず、「ナチチャコ」※さん、お二人が元気だった頃、僕は深夜放送を聞いていないです。（会場・笑い）

※67年8月〜82年7月、金曜 木曜深夜 野沢那智 白石冬美。

僕のとこ（74年4月）は、担当のメインがTBSではなくて外注のプロダクションで、外注の担当ディレクターが、こんなこと言ったらなんなんです、番組に対して愛のない人だね。（会場・苦笑い）

ぼくは、きたやまさん、拓郎さん、南さんから受け継いでいるから、喜んで受けたんです、ほとんど手弁当みたいなことでした。

（小室 等さん）



鈴木 大変生臭い話から始まりまして…。TBSラジオも、それなりに大変な事情もあって外注という制作体制になったわけで、大変にご迷惑をおかけして、弊社社長に変わって詫言ひ申し上げます。（笑い）

小室 だから、あんまり『バック』について語れるほどのネタがないんですよ。

外山 小室さんご自身は『バック』は聞いてらっしゃったんですか？

小室 （鈴木 順さんともうだと思っただけ、あの時期、60年代から70年代にかけて、僕はフォークの世代ですから、ラジオを聞くよりも、みんなで集まってフォークソングの練習をしているような時期でしたから、あんまりラジオには接してなかったんです。

鈴木 でも、受けてやってみたら、こんな酷い状況だったことがわかって、すぐに放り出さなかった、そのわけは？

小室 面白かったんです。深夜放送には来たる人が少なくなってね。キャロルとしてはもう有名ではあったけれども、永ちゃんなんかね、矢沢永吉さんが、ぶらっと僕の本番のときに訪ねてこられて、蕩々と自分がどんなふうに音楽を愛しているのかとか、ロックを愛

しているのかとか、何をやってきたのかとか、そういう話を…。

外山 呼んでないんですか？

小室 呼んでないの。ノーギヤラ。

外山 えー！

鈴木 個人的な繋がり、お友達の人脈なども駆使して、声をかけたゲストが来てくださり…小室さんの『バック』は続いていた。

小室 僕自身も面白がっていたんでしようね。

鈴木 なるほど…。

### もう一つの価値観を！

鈴木 きたやまさんは小室さんの5年前、69年4月から担当されたわけですが、どういう形でお話できたか、覚えていらつしやいますか？

きたやま それははつきりしていて、当時医学生で、週に1回東京に来る日があったんです。TBSテレビの仕事で『ヤング720（セブンツォー）』※という番組の収録があったんです。午前中の授業に出て、京都から東京に来て、テレビ局に行つて収録していた、そして、その夜に仕事を入れられちゃった。

ですから、私の意識としては深夜放送というよりも、関西にいて東京に出てくるっていう感じだったので、『バック』を聞いていたというのはなかったです。

※TBS系列の朝（月〜土）の情報番組。

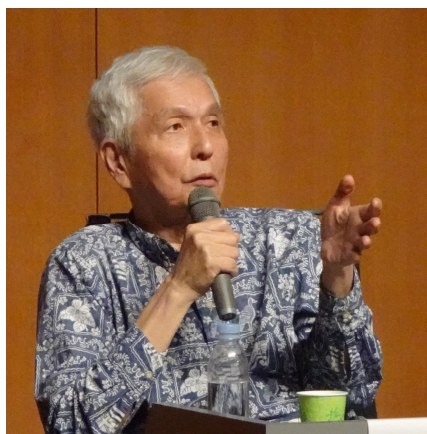
66年〜71年放送。収録放送。3組の男女司会グループが交互出演。北山修の出演は69年1月〜9月、水曜（TBS系）、TBS制作。

きたやま もう一つの価値観を生かそうっていう発想があった。それとSEXの話題を出すことが、私にとっては課題だった。世代的にもセックスには関心があるときだし、この性的な話題とか、人が死にたいと思う気持ちと

か…。ああそうだ、ライバルのニッポン放送で、黒田征太郎が『青春ホットライン』※をやつていて、自殺なんかをテーマに取り上げていた。だから、そういったものを拾い上げる、メインのカルチャーの中では滅多に話題にならない、夜の話題だからという意識もあったのかな。

※69年11月17日〜71年6月5日、月曜 日〜土曜 日（TBS系）若者向け人生相談。パーソナリティー…黒田征太郎、高橋基子、ディレクター…上野修（後のドン上野、ラジオプレス社）

（きたやま おさむ さん）



きたやま それと、僕はここを強調しておきたいんやけど、番組スタッフのディレクターやプロデューサーも同じような世代で、みんな勢いがあるって、番組についてこう作りたいああ作りたいって、意見がみんな一緒だったというわけでもないけど…。

小室 でも手作りだったんだね。

きたやま うん。それで一緒にやつてた。

外山 へえー！

勢いは、もう一つの国を作る！

きたやま もう一つの国を作るみたいな勢いがあつたよ。

外山 そんなに。スタッフと出演者との一体感っていうか、一つの番組をみんなで作り上げていく、みたいな一体感？

きたやま それは同じ音楽が好きであつたり、同じような曲が好きだったり、それで榊井論平※さんの本のタイトル『もう一つの別の広場』※に象徴されるような意識ですよ。もう一つの時間帯っていうか、もう一つ国ができるような状況がありました。

※1 39年生まれ。64年4月TBSに、アナウンサーで入社。70年4月〜71年3月、水曜・火曜深夜の『バック』を務める。

※2 『ぼくは深夜を解放するー続ー』も一つの別の広場（70年ブロンズ社）

鈴木 大体、『帰って来たヨッパライ』自体が、深夜放送の力で世の中に大きく出てきたってこともありましたよね。※

※ 神戸の独立系AM局「ラジオ関西」の『ミッドナイト・フォーク』で初めて放送された。

きたやま LF（ニッポン放送）の『オールナイトニッポン』で、かかり始めたおかげで、それも一つの番組の中で3回ぐらいしかつたんですよね。

外山 へえー。

きたやま そういうことをやってのける自由があつたんですね。

外山 北山さん自身も『帰って来たヨッパライ』があれよあれよと売れていくとか、いろんなところで掛かって耳にするとか、身に染みてわかるぐらい凄かったの？

きたやま それは、今度の映画『トノバン』※の中にも出てくるんですけどね。あれにちよつと火がついて関西で売れ始めた、まあ、この

ままいったら数万枚は売れるだろうなというその瞬間ぐらいのときに加藤和彦の家に行つて、バンドを解散しているからね…。

※ドキュメンタリー映画『トノバン 音楽家加藤和彦とその時代』監督：相原裕美  
日本の音楽史を変えた先駆者、加藤和彦の軌跡を追う。そろそろ、加藤和彦のことを語ろうかー。証言ドキュメンタリー。  
24年5月31日公開。

（鈴木 順さん）



鈴木 学生時代が一番最初のフォーククルセダースの解散記念レコード※でしょ。

※67年、解散記念の自主制作盤アルバム  
10月15日発売『ハレンチ』

きたやま ええ、300枚作つたんですね。売つて、火がつき始めたのは10月16日頃なんですよ。ラジオ関西から火がついた、ですからラジオのものなんですよ、

音といいスピーカーといい、（トランジスタラジオに）ちようど合っていたみたいな、世代的にも「もう一つの世代」が作つたという、中央に対する学生たちが作つたという「都市伝説」みたいなものがびつたりだったんですね。

それが、加藤和彦が再結成に乗らないんだよ。就職決まっているから、バンドはやりたく

ないって。東京で火がついたのが10月の下旬ぐらいで、11月ぐらいになったら東京から契約交渉に來られ始めるわけ、その瞬間は覚えてるよ。加藤も含めて、みんな目の色が変わつていくの（笑）、本当にやらないって言うていたのに、やろうかあーいう話になって、でもメンバー全員揃わなかったんです。そして、はしだのりひこが入つたんです。

鈴木 それが世の中に一番よく知られている『ザ・フォーク・クルセダース』なんですね。

### 居場所が深夜放送

きたやま 3人はみんな、どちらかというと背が高いか低いかで、身体的なコンプレックスっていうのがあつたんですよ。

今でこそ店にあるけど、当時は1寸だつて僕は合わなかったんですよ。加藤和彦なんて何買つても合わないでしょ、お母さん一生懸命セーターを伸ばしておられるわけで、洗つては伸ばし、洗つては伸ばしてで…。

この世の中に居場所がない感じが、すごくあいつにもあつて、私にもあつて、バンドとして揃つても、やはり何か居場所のない凸凹トリオで、それが「深夜放送で居場所があつた！」みたいな…。

だから『バック・イン・ミュージック』のバックが妖精だったというのはわかるんですよ。私達はぼつと出て、ぼつと帰つて行く。関西からぼつと出てきて消える、そういうのをトリックスターっていうんですよ。かき回しては帰つていく、捕まえられない。『バック・イン・ミュージック』の妖精バックはすぐあつていると思つていました。

小室 『フォークル』っていうのは、いわば存在がいびつだったんですね。

きたやま それを『瘤のない駱駝』※って言つ

ていたよね。みんなは瘤のあるのがラクダだと思つてるけど、僕はコブないねん、それでも何か、もうええやんっていう感じで、置いてもらえた。それは深夜放送だからこそですよ。もう一つの文化は、まだルールも決まつていない、何やつてもいいみたいな。

※68年3月発売のEPのB面 作詞：北山修、作曲：加藤和彦。ちなみにA面は『悲しくてやりきれない』（作詞：サトウハチロー、作曲：加藤和彦）。

小室 コミュニティというか共和国と呼んでもいい。

きたやま そういう感じはありましたね。海外にもあつて、ウッドストック・ジュネレーションとかビートルズ世代とか、呼ばれていた。鈴木 60年代の末から70年代は、日本自体も世の中が大きく変動していた時代で、特に若者学生たちが世の中を実際に力技で動かしていく…そんな時代でした。

### もう一つの国を作る



きたやま 若い世代がその盛り上がりで、大怪我したり大失敗していくじゃないですか。機動隊が導入され、挫折を迎えても、あの一瞬僕は「もう一つの国を作るんだ」と言いまし

た。

だから中津川フォークジャンボリー※の時は、なんかもう一つの共和国が一瞬たりともできるのではないかって、ウッドストックの映画に寄せられて、ヒッピー的な人生もね。でもね、日本は蒸し暑いし、土の上で寝られないんだ。だから、「今夜の夜汽車で旅立」ととか歌っても、日本の場合は蚊がいっぱいで風呂に入りたいのよ。(笑い) だから、この文化の違いはどうしようもなかったけど、一瞬夢を見たですね。「いい音楽が流れば、いい国ができる」と思いました。

そしたら、第3回中津川フォークジャンボリーで、拓郎組対小室組とか、拓郎組対北山岡林組みたいな対立が起こってしまったね。

外山 対立とは、関東対関西ってことですか？

鈴木 東西対立というか、お互いに、あいつらは何だつて…。

小室 中津川フォークジャンボリーは、行ってみると、まるつきり関西なんですよ。

鈴木 地理的にも西の方ですね、中津川は。第3回のフォークジャンボリーに、東京から小室さんたちが呼ばれて行つたわけですね。

※岐阜県恵那郡坂下町(現在の中津川市)にある杣の湖の湖畔で、69年〜71年夏に3回開催された。第3回は8月7日〜9日で、2万人〜2万5千人。

小室 僕ら、六文銭で行きましたね。あと拓郎さんと。

鈴木 拓郎さん元々広島だけ？

小室 いやでも、もう東京で活動していたからね、

外山 小室さんも、関西は気に食わないって思っていたんですか？(笑い)

小室 僕が関西を気にいらない？

外山 そう。

小室 関西が僕を気に入らないというのは、明らかに感じていましたけれども。

外山 きたやまさんが悪いってこと？

小室 言ってみれば(笑い)そういうことですよ。

鈴木 なんでしょね、関西から特に関東をみる目って？

きたやま いやいやそれは、『帰って来たヨッパライ』が支持されたときにも、関東に対するアンチテーゼだったと、僕は今でも思っているよ。

鈴木 東西の話に戻すと、初めて小室さんが北山さんたちを見たときに、大きなカルチャーショックがあった…。

小室 関西地方を席卷するフォークソンググループの人たちがいたんです。きたやまさんも含めて、岡林信康、高石ともや、そういう人たちの「関西のフォークソングカルチャー」は、関東から見えていて凄いいことが起こつていて、もう全く先を越された、と。



僕らがアメリカのフォークソングに刺激を受けて、反戦歌とかピーター・ポール＆マリーに繋がるものを歌わなきゃと思う間もなく、関西でばつと火がついて、すごいことが起きているというので、関西に対してのリスpek

トがあったんですよ。

逆に言うと、関西のフォークムーブメントに対して、東京・関東のコンプレックスを僕は明らかに持っていました。だから、そのムーブメントからフォークルが東京にやつて来るというので、僕は渋谷公会堂か、どっかに聞きに行ったんですよ。

客席で聞いていたら、フォークルがある歌の前に、「皆さん、こんにちは、僕たちは関西からやつてきました。箱根の山かどつかで、東京と関西がもし分断されているとしたら、僕は今日ここには来られていないんです。そういう僕たちが歌う歌が、この歌です」って言うて、『イムジン河』を歌ったんですよ。ものすごくショックな出来事でした。

それは『イムジン河』を、そんなふうに意識的に聞いたのは初めてのことでした。その歌にすごく僕は感動しました。それと、先を越されたつていう嫉妬心がありました。

鈴木 お歌いになった立場としては、どう思う思いで？

きたやま 戦後直後に生まれた、あるいは終戦前後に生まれた人間はわかつてるわけですよ、北海道と本州の間で分断を食ったかもしれないし、まだ沖縄は返還されてない…。その状況で、あの歌を歌ったわけですからね、今みたいな話をして…。

小室 そのとき、もう既にポリテイカルな意味合いがついてるのが、あつたつてことだね。

きたやま それがポリテイカルかどうか分からんけど。(支持する) 人数は多いんだけど中央ではない。関西では大ヒットしているのに東京にはまだ届いてない。あるいは、ラジオだけでテレビには紹介されない。こういう分断というか差異というか、階級差みたいなのがあつちこつちにあつたね。

京都の駅前の人間なので被差別部落の近所

にある、にも関わらず、京都人だけど祇園祭の地帯ではない。祇園祭りは、中京区を中心にしたお祭りで、僕は下京区、加藤和彦は伏見区です、南の人間ははじだのりひこ、だからそこにも分断がある、どこにも分断はあつたんですよ。

だから、ポリテイカルかどうか分からないけど、そういう自覚、面白くないなと思う感覚がどこにでもあつたんで、「おらは死んじまつたんだ」と言つた途端に、抑圧されていたものが爆発した！…：みたいな。(笑い)

小室 反骨の精神はあつたつてことだね。

きたやま 反骨というか、若さのエネルギーですよ。僕は未だに覚えている、加藤和彦も僕も「女の腐った奴つて」言われた。「女の腐った奴」つて、なんか語弊があるけどね。僕は女が腐つたら、どないになるのかなと関心を持つてるんだけど(笑い)、そういうふうに言われている世代だったんですよ。

だから、長髪の人間が中に入れてもらえないとか、ちよつと女性的な感覚を好きな人間が愛されないとか、ものすごいよくわかつていた、それは自覚していた。

## ドキュメンタリー映画「トノバン」

鈴木 加藤和彦さんのドキュメンタリー映画『トノバン』がまもなく公開※です。この話をぜひ伺いたいのですが…。

※『トノバン 音楽家加藤和彦とその時代』5月31日公開。企画・構成「編集」プロデュース…相原裕美。日本の音楽史を変えた先駆者、加藤の足跡を追う。

きたやま 私達は、どこに行っても居場所がないという感じがあつた、強迫観念のように、いつもそういう感じがある。だから、排除されている人間が、メインカルチャーに何か意見を言うなり、表現活動を行いたいという思い

で始めるんだけど、そうすると今度はいつも「決め事」が生じる、これをやれ、あれをやれ。

だけど、『帰って来たヨッパライ』なんて5回歌ったら、もう嫌になってきますよね。正直言って、これが『帰って来たヨッパライ』でデビューした者の、何か悲哀というか…あんな歌ね、加藤和彦は虚しかったと思う。ロパクです、ロパクで無いのは、僕のとこだけです、よ、生(ナマ)で出来るのは「なあ〜お前ら…」のセリフだけ。

流行歌の歌手の方々に申し訳ないんだけど、流行歌の方は百回歌つても2千回歌つても、芸が研ぎ澄まされていく。でも僕たちの芸は何もないわけでしよう、口を合わせるだけやん。そういうのってすごい飽きてしまう。

外山 神様だけが上手になっていく。

きたやま 今でもやれますよ(笑い)。



自己実現という言葉があるが、自分を表現するのが一生の課題じゃないですか。どこに行っても「ヨッパライをやれ!」と言われるだけで、嫌になってきて重いですよ。それが加藤に残ったのだと思う。

だから、新しいことをやって、それが受けても、彼は次のことを次々とやって行きます…それがよう描けている。スポットライトを浴びてこういう奴だと、みんなが思った瞬間に、もう次の「サディスティック・ミカ・バンド」に行く。それから安井かずみ<sup>※2</sup>と結婚する。彼女が亡くなったら、次の人と…これが最後、ああいう死に方をする<sup>※3</sup>というところまで、よく監督されたと思うんです。

ぜひ、ぜひご覧になって下さい。何の参考にもならないですよ。(笑い)

※1 72年にデビュー、加藤和彦・加藤ミカ・角田ひろ・高中正義。75年11月加藤夫妻離婚し、バンド解散。

※2 39年〜94年3月。作詞家、訳詞家、エッセイスト。作詞の総数4千曲。77年に8歳下の加藤和彦と結婚。肺がんのため55歳で死去。

※3 09年10月17日軽井沢のホテルで遺体となって発見された。首吊りによる自殺と見られている。62歳没。

小室 「トノバン」というネーミングはどっから来ているんですか。

きたやま ドノヴァンというイギリスのシンガーがいてね、羽根飾りをした、ちよつと変わって偉そうな、そういう殿様のところが加藤にもある、そんな感じで「トノバン」と仇名をつけたんです。

鈴木 自分たちで手売りしていたフォークソングが、あるとき突然メジャーになって、音楽の世界は大きな変わり目になったと思うんですが？

きたやま フォークがブームになって、私達はある、そんなに仲がいいわけではないが、切磋琢磨して、お互い刺激し合って盛り上がりていました。

それが突然、中津川フォークジャンボリーで乱闘事件みたいな血が流れたりして、その片方では物すごい数のLPが売れていくって、いうことが始まる。

つまり僕たちフォークルのときは、まだシングルパックだったが、ビートルズの影響を受けて、僕もやり始めるんだけど、コンセプトアルバムと言った一つのテーマを決めてLPを作っていくと、これが吉田拓郎、井上陽水らによって可能になって、物すごい数売れていくことになる。そうすると若者たちが力を持つて、管理できなくなっていく…。

学園紛争の占拠で機動隊導入になり、それに影響され、大ホールでもシートは剥がされるわトイレは壊されるわ、みたいな。フォークジャンボリーでは一人の水死者まで出たんです。「零こそすべて」だったが、暴力を管理できないんだ。「いい国を作ろう」としても、学生運動の内ゲバのように管理できなくなっていくじゃないですか。

それで何が始まるかっていうと、「お席から立ち上がられますとコンサートは中止されます!」って言われる。そしてニューミュージック時代になる。煽る音楽はちよつといい、スキー場に行っても流れる…。

鈴木 確かに、グレンズでは『山谷ブルース』はかかりませんね(笑い)

きたやま 何かちよつと飛んでいくような、地に足の付かない音楽になってくる。そのときに、東京のプロダクションがものすごい力を持ち始める、ジャニーズ系とか…。

外山 それは、いつ頃になるんですか？

きたやま 80年ごろ。

## 日本のグラミー賞を作ろう

きたやま 僕に忘れもしない瞬間がある。この話は滅多にしないんだけどね、財津和夫さ

ん、小田和正さんと一緒に日本のグラミー賞を作ろうっていう話をしたことがあって、もう結構具体的に進んでいたんですよ。ところが、そういうことを始めたときに、今度は逆に私達の音楽をかけられなくなっている。東京の大きなプロダクションの曲が主に番組では使われるようになった。

もうちよつと富の分散、社会主義者みたいなこと(笑い)言っているけど、あのきに我々もURC<sup>※</sup>って言って、いろんなシンガーにレコードを作る機会を提供しようという仕掛けを作ったこともあったんよ、必ずしも成功してないけどね。

※「アングラ・レコード・クラブ」の通称。

69年1月に設立された会員制のレコード製作と通販の会社。日本で最初のインディーズレーベル。一、二回分の会費4千円を納入した入会希望者が殺到し、わずか半年で全国140のレコード店と流通を通さない販売契約が成立。販売第1号LPは岡林信康の『わたしを断罪せよ』。

鈴木 75年のフォーライフよりもっと前ですよね？

きたやま 儲かった金で映画を作ろうとして大失敗したり、ろくでもないことに時間を使っていたけど、もうちよつと何とかしてればよかったね。やつぱり、グラミー賞作られたね、もう一つの文化をね。

鈴木 日本のグラミー賞の話はいつごろ？

きたやま 80年頃だね。

## 若者文化の登壇

鈴木 『バック』に話を戻します。当時は今と違ってメールがないので、お便りは全部、葉書と封書で来るわけですよ。

きたやま 葉書だけではなく、僕らが「ルート」

を作ったんですが、アマチュアの方が録音してテープや音源を、次々とカセットテープで送ってくださる。それで番組のコーナーが一つできる。

僕が一番記憶に残っているのは、タケカワユキヒデが面白かったなあ、ゴダイゴの。彼はオリジナルを作ってくる、英語で、すごいと思いましたね。

鈴木 カセットテープは封筒に入れて、そのまますぐ送れるから、曲を送りたいリスナーには便利だったんでしょね。

外山 送って来た曲が、北山さんがいいなと思ったら、それを深夜放送でかけて。

きたやま かけて、それで喜んでいただけて、デビューに繋がる…。

外山 へえー。

(外山恵理さん)



きたやま 深夜放送が、ある意味、若者たちの文化の登竜門になっていくわけでしょ。そういう回路を作っていたいたのは、よかったと思うんだよね。

小室 フォークが出てくるまでの音楽業界、商業的な音楽は演歌流行歌の専売特許で、ひと頃までは、こんな風に言われていたんです。興行を打つのは、大体どこに行っても地元がコンサートを牛耳っていたんですが、そのやくざ屋さんたちが、「俺たちが手を出せなかったのはフォークだ、あそこだけは、どう手を

つけていいんだかわからない」と。

外山 永六輔さんがなんで作詞をやめたのかって、作詞も作曲もできる人たちが出てきて、だからやめたっていう話がある。

小室 僕の出番はないって。

きたやま 永六輔さん自身も自分で歌っていたし、シンガーソングライターという面もごさいます。ビートルズもシンガーソングライターなので、レコード会社を作っているわけですね。そういう時代だったことが僕らの後押しをしてくれたし、世界中がみんな一緒に走っていたんだけど、フォーククルが一つだけ偉いのは、「自分で売りに行った」こと、報道局まで持つて行ってかけてくれたって頼んでヒットさせたという思いがある。

僕は自分で詩を作って、自分で曲を作って、レコードまで発注して、そして、売れないからって言って売りに行ったのは、僕は自分の誇りなんです。ビートルズがやってないから。(笑)

外山 小室さんはレコード会社作られたじゃないですか…。

鈴木 フォーライフ・レコード。

外山 そういうことは、なかったんですか。

きたやま そこは夢でしょ。フォーククルはその原点を作った。レコード盤作って売りに行ってね、数が最初300枚だったからできたわけでしょ。これが2百万枚、3百万枚。LPが千万枚売れる時代に入っていくと、これは自分たちでは管理できなくなる。

鈴木 ある時から、フォークも、メジャーのレベルでデビューする。

小室 それは吉田拓郎さんだって、『出発の歌』が出たときに六文銭は商業主義に身を売ったと言いい、それから半年もしないうちに、自分で『結婚しようよ』を歌って、ねえ(笑)。

鈴木 キャンディーズのヒット曲『アン・ド

ウ・トロワ』まで書いて、自分で足音まで入れたりする…、これはどういうふうに見たいのか、いかがでしょうか？

きたやま 良いポイントですね。(笑)僕がそれを言われたのは、大歌謡曲の簡美京平と組んで、『さらば恋人』を書いたとき。あれだけ否定していたのに、組み始める…。

僕ね、加藤和彦はその時代についていく、或いは、それ以上のものを作ろうとする、そのトップランナーになろうとしたと思うんだ。映画を見ていただくとよくわかります。

そのとき歌の自身に歌われたような人生を送ろう、歌を裏切らないで、おこう、なるべく言行一致に生きようとする葛藤までも大事にする…というのは、僕や小室さんにもあったと思うんだよ。

小室 いや、それはね、もう一時とは言わず、ずっと売れたと思うんですよ。(笑)

でも、こんなことまでして、という思いはあったと思うんです。

外山 …流されないように生きていくのが本当に大変だったんだらうなと思う。

小室 葛藤はある、その一例を言えば…『出発の歌』がヒットして、テレビ局のあつちの局こつちの局からも声がかかって、毎回毎回、歌っていくわけですよ。そういうことをやっているうちに、一旦、解散したんです。

つまり、こういう売れ方をしていくなんて嫌だね、いつそのこと六文銭やめようよ、と言って解散したの。

きたやま この前、岡林とLF(ニッポン放送のイベントで会ったんだ。これが10年ぶりぐらいだね。そしたらさ、もうやめようかって言う話になって、でも、ギャラがいいからなー(笑)。

そういうもんだよね、やつぱり生き残るためには金も必要でしょう。この間の葛藤たる

や、ねえ。止(や)めるのが、難しいね…。

鈴木 それはすごい言葉ですね。「やめるのが難しい」、やめ時がわかりにくい。

小室 僕の止めどきは何かっていうと、僕は今、大体基本一人でギターを担いで一人で歌うのが、大体自分のところに来る仕事なんです。で、立つて歌っているんです。大体最低2時間ぐらいのステージを立てて歌うんですが、それを座って歌うようになっていく時期が、それぞれのミュージシャンにあるんですけれども、僕は自分が座って歌うようになったら、やめようと決めているんです。

鈴木 いや、いつまでも聞いていたいと思います。

外山 座ってもいいから聞きたいって、皆さんそう思っていると思います。

小室 一つには物理的なこともある。立つて歌っていると、知らない間に体を動かして、いわばストレッチ効果みたいなものですね。(笑) そのパフォーマンスの中でやっているんです。

それが固定されて歌うと、自分が鑄型にはめられていて不自由で自分の望むパフォーマンスではない、そのぐらいだったら、やめよう。

鈴木&外山 ありがとうございます。まことに残念ですが、ちやうど時間になりました。ゲストのお二人に盛大な拍手を！

※編集部注記

本稿では、『バック・イン・ミュージック 昭和が生んだラジオ深夜放送革命』(編著:伊藤友治+TBSラジオ、発行元:DU BOOKS、発行:2015年10月、を参考にしました。

## 今週短信

24年初夏

### 渋谷の再開発と日曜美術館

河野尚行

世田谷区の南はずれの低層マンションからも、多少高台に位置している為か、都心に展開している高層ビル群を幅広く見渡すことが出来る。

北北東には都庁を中心とする新宿の高層ビルが林立し、隣に三角屋根のドコモタワーが顔を出す。その東手前に広がる代々木公園のはずれあたりから渋谷のビル群が展開、渋谷の右奥には六本木ヒルズが虎ノ門周辺の高層建築を背景にして聳える。そのまた右に最近ひととき背の高い建造物・麻布台ヒルズが立ち上がり、築65年経た東京タワーの間に割り込んできた。

こうして東京都心は臨海部のタワーマンションを含め、年々高層ビルが増殖、変貌に変貌を重ねているが、私がつとも気になるのは貧乏学生時代に「恋文横丁」で安酒の味を覚えて以来、職場もあつた関係で、長年通いなれた渋谷の街の変化、変貌ぶりである。

☆ ☆

今年1月に放送された日曜美術館が伝えたところによれば、戦後、渋谷の街を象徴する渋谷駅周辺の建物群を設計したのは、ル・コルビジュの薫陶を受けた建築家・板倉準三だったという。東急の創始者・五島慶太の依頼を受け、板倉はプラネタリウムを屋上に備えた東急文化会館や、東横線のターミナル駅に連結する東横デパート3棟を建設、地下鉄銀座線のターミナル駅を引き込み、国鉄山手線とも接続

を図り、更に京王井の頭線とも連携の工夫をして、交通便利な副都心・庶民の街の拠点を作り上げた。

この板倉が基本設計した庶民の街・渋谷の顔が数年前から急激に変貌し始めている。

現在進行中の渋谷の街の再開発、大変革の音頭をとっているのは多摩美術大学学長で建築家の内藤廣であると、これも3月末に再放送された日曜美術館の「渋谷駅×世界一複雑な都市開発を率いる男」が伝えている。

☆ ☆

内藤廣が東京と安曇野の『ちひろ美術館』の設計者であり、高知にある評判の「牧野記念博物館」を設計した建築家である事は知っていたが、この10年の間、渋谷の再開発のコンセプト・リーダーを務めている事は、この番組で初めて知ることになった。

内藤廣は云う。都市は人間の為にあるリアルな世界だ。ひとりの神が全体を設計するのではなく、街づくりに当たっては、そこで暮らす人々の多様な意見に十分耳を傾ける必要がある。地元地域の人間こそ、自分の街の成り立ちや特色を良く知っているはずだ。

そして、街の再開発を担う人は建築設計の能力はもちろん、住民の多様な意向をくみ取り、それを調整する行政的手腕の持ち合わせも必要であると内藤は云う。

この姿勢に地元の道玄坂の商店街の理事長も、宮益坂町内会の相談役も大いに賛同している事が番組を通して伝わってくる。

☆ ☆

渋谷駅周辺の地形は元々、渋谷川が作った谷の底に当たり、渋谷の周辺には坂が多い。宮益坂、道玄坂、オルガン坂にスペイン坂、さくら坂に八幡坂などがあり、国道246の東南側には桜丘、南平台といった台地が広がり、結構高低差があり、ノッペラボーの地形で

はない。繁華街も多様で、若者が集うセンター街や中央通り、井の頭通り、文化村通り、宇田川町通りの他、公園通り、フアィアー通り、八幡通りなど、繁華街も多様に散らばり、その先の周辺部には文化施設や学術施設や大使館も幾つかあり、閑静な住宅街にも繋がる。

内藤は云う。それぞれの街には個性がある。鉄筋コンクリートで固めた同じような高層ビルが林立し、それぞれが城のように外部防衛を固めても街は栄えない。

人々が集い易く、お互いが賑わいを感じ取られる街こそ反映する。個々の建物は個性的であつてよいが孤立せず、お互い連携が取れるのが望ましい。せめて公共の建造物は内外から集う人々のお互いの動きや表情が見える見通しが効く建造物でなければならない。

調べて見ると、彼はこの考えの基礎を鳥取生まれの世界的経済学者・宇沢弘文の「社会的共通資本」から学んだという。

☆ ☆

10年前、東横線が地下に潜り副都心線と繋がったが、安藤忠雄が設計した地底の渋谷駅には何故か馴染めず、自由が丘経由で渋谷の街に出る事からしばらく足が遠のいていたが、これらの日曜美術館に触発されて、久しぶりに副都心線の駅から、渋谷ヒカリエを通じて渋谷の街に繰り出してみた。

内藤が関与した渋谷ヒカリエの透明なビルから地下鉄銀座線の渋谷新駅のホームを経て、井の頭線に至る空中回路を歩いてみる。

ここからは、宮益坂と明治通りの交差点に始まって、山手線と埼京線を越えて、渋谷のスクランブル交差点までの街の表情、人々の動き、街角の人々の絶え間ない賑わいを幅広く見渡せる。反対側の国道246側の人の動きも回廊の窓から見つめることが出来る。

内藤はこうも云う「日本の人口は若者を

中心に年々減少しているが、長期展望に立って街を作り、見守るのは彼らの世代だ。ぜひとも若手の参加、発想が必要である」と、そして彼の教えを受けた若い建築家達の「風だまり、陽だまり、水だまり、縁だまりが、人だまりに繋がり、生き生きとした街づくりに繋がる」というコンセプトにも、共鳴する。

☆ ☆

渋谷の街の再開発事業は、これからは国道246号を越えて、代官山に通じる桜丘地域にも広がろうとしているが……。

私としては、文化の匂いの全く感じられない金融業者によって深いダメージを負ったNHKが、新しいメディア時代を迎える今、どう再開発、再生していくのか、しっかり見守ってきたい。

\*\*\* \*\*

### 展覧会 散策

前川 英樹

コロナが下火になってから、と言って終息したわけではなくまだ感染は続いているのだが、去年の夏以後やつとあちこち行く気になつてきた。展覧会などに足を向けることが増えたので、その記録。

コロナで足止めされていたことへの反動でもあるが、魅力的な企画が連続的に集中して開かれた。企画者も足止め状態だったのだろうか。

① 「小津安二郎展」神奈川近代文学館

② 「交差する物語・・・橋本成一とロベール・ド・アノ」(写真展 東京都写真美術館 館

③ 「風景論以後」(略称「連続射殺魔」)他 東京都写真美術館

- ④ 「横尾忠則 寒山百得展」 国立博物館 慶成館
  - ⑤ 「激動の時代 幕末明治の絵師たち」 サントリー美術館
  - ⑥ 「新版画の沁みる風景」 浮世絵ギャラリー（川崎）
  - ⑦ 「本阿弥光悦の宇宙」 国立博物館平成館
  - ⑧ 「中平卓馬 火 氾濫」 （写真展）国立近代美術館
  - ⑨ 「安井仲治」 （写真展）東京駅ステーションギャラリー
  - ⑩ 「木村伊兵衛 写真に生きる」 東京都写真美術館
  - ⑪ 「大吉原展」 東京芸術大学美術館
- といったところだ。どの企画も面白かった。特に、「風景論以後」で上映された「（略称）連続射殺魔」が観られたこと「大吉原展」で北斎、広重の浮世絵革命？以前の浮世絵の記録性（ドキュメントとしての浮世絵）を知ったことは大収穫。

表現は時代を反映しているのだ、と改めて思う。

\*\*\*\*\*

## ドキュメンタリー

### 「ひとしずくの風」制作

中海テレビ放送特別顧問

市川 重樹

「ひとしずくの風」奥大山自然塾物語」というタイトルのドキュメンタリー（45分）を制作しました。脚本家の倉本聰さんが塾長を務める北海道富良野自然塾の7番目の分校として昨年5月鳥取県江府町にオープンしました。

奥大山は大山隠岐国立公園の南麓に広がる



高原地帯で、ブナやミズナラを中心とした広葉樹林が広がります。そのかけがえのない自然環境を守ることの大切さを体感的に学ぼうというもので、①緑の教室②1メートルの地球③46億年地球の道の3つの環境教育プログラムが盛り込まれています。

全国で一番人口の少ない鳥取県の中で一番小さい町（江府町）が、地球規模の環境問題に目を向けようというその姿勢に心を動かされ取材を始めました。

主人公は江府町職員の光島宏美さん（46）です。光島さんはかつて青年海外協力隊員の作業療法士としてボルネオ島のジャングルで暮らした経験があります。そこで多様な生物が暮らすジャングルがすさまじい勢いで森林伐採され、パームヤシの畑となっている現実に驚き、環境問題に目を向けるようになったと話します。

ジャングルガイドで森を守っていた現地の住民と結婚し、2年前に岡山県から江府町へ移住しました。持ち前の熱意と行動力で、開設に向けて準備が進む奥大山自然塾のインストラクターに真っ先に応募しました。

それは、自然と人間が共存して生きるジャングルでの生活体験を経て帰国した時に、「モノにあふれる日本の生活」にとても違和感を覚えたことが原因でした。

人間にとってかけがえのない「自然環境を守り」、一滴（ひとしずく）の水を大切にすることを学んだと語ります。

自らも環境にやさしい生き方を実践している光島さんのエネルギーシユな活動を通して、人と自然との共存、一滴の水を大切にすること、つましく暮らす、ことへの意味を考えます。

番組制作に当たって既存の音楽では表現できないと考え、テーマ曲は地元江府町出身の音楽家へ作曲を依頼しました。この作品は制作した中海テレビ（ケーブル局）が2月に放送3月には私の古巣の日本海テレビが放送してくれました。ご覧になって頂けないのが残念です。日本海テレビ時代に37本、中海テレビに移ってから4本目の作品となりました。



## 新年に一人の師を思う

山路 家子

\*\*\*\*\*

井上ひさし校長と山下惣一教頭……その学校は、一年に一度、山形県川西町（校長のふるさと）で開校されました。「農業から世の中を見る、時代を考える」を校是とする「生活者大」学校。毎年、老若男女が数百人、全国から集いました。山下教頭がまとめた一冊の本「井上ひさしと考える日本の農業」を折にふれ読み返していますが、今、お一人に訴えたいことがあります。

それは種子法が廃止されたこと。某学者の言いなりに碌な審議もせず、です。直ちに「種子法廃止は違憲」と提訴しましたが、一番の裁判官は、この重大性を理解できず、高裁に控訴しました。

採種農家の菊地富夫（山形県西置賜郡白鷹町）さんは、意見陳述の中で、圃場の管理がどれ程大変なことが、万が一にも、おかしいものが種子に混じってはならない、絶対に！と父君の言葉も添えて話しました。

折も折「みつひかり」不正事件が発覚しました。種子法廃止で民間企業を参入させ、農水省が喧伝した種子！それが、異品種混入、発芽率の虚偽報告を長期に行っていたのです。種子法廃止で危惧していたことが起こった。

井上校長、山下教頭がご存命だったら！と思います。二〇一四年、校長は卒寿、教頭は米寿を迎えられます。お祝いは、私の決意表明です。

「種子法廃止は違憲」の裁判を応援して、種子法を復活させます。

農作業の源である種子は、国や都道府県がしっかりと守るべきなのです。

※1 山下惣一編 家の光協会 2013年  
7月1日発行。

※2 竹中平蔵

※3 三井化学クロップ&ライフソリューション  
ーション

\*\*\*\*\*

## 転ばぬ先の杖

渡辺 紘史

5月25日放送人グランプリ贈賞式の前挨拶に伺った控室で「午前3時まで飲んでいる人は、たいてい早死にです」という凜とした声がある。大山勝美賞のプレゼンターの渡辺美佐子さんが今野会長と話している。92歳と88歳、お二人の健康談義らしい。挨拶した私は「早死をした方とはどなたですか？」と話を「つないだ。『草野大吾』と美佐子さん。彼を知る今野さんも私も、なるほど笑い（失礼！）、今野さんは、姉さんに叱られた弟のように「私は毎晩飲んでるけど、すぐ寝てしまうから」と、日を超えてまで飲んでいないことを強調し、場を和ませた。

間もなく開式が迫り、話を切り上げようと私は「飲みすぎにも注意すべきですが、転ばないことも大切ですね、YさんやTさんも転ばれたことがきつかったですから」と、最近亡くなった先輩の名を引き合いに、目の前の先輩に倅そうな口をきいた。美佐子さんは「そうね、お互い心得ましょう」と優しく応え、私は、若輩が言ってしまった年長者に対する無礼さを悔やんだ。

その日、贈賞式は大過なく過ぎ、懇親パーティーの最後を見届けた私は、事務局に戻り、資料の束をリュックに詰め、事務局長の深尾さん

んと今野さんや前川さんらの飲み会に駆け付けた。その慰労会風の集いには、他に監事の河野さん、小川さん、菅野さんがいたと記憶する。私は、パーティーでの受賞者の方々の気持ちの良い振る舞いに飲酒が過ぎ、立ち続け喋り続けた贈賞式での疲れもあったのか、飲み会ではふらついておとなしかったそうである。皆と別れた後、電車を乗り過し、深夜に帰宅した私は、そのまま寝てしまい、飲み会での詳しい様子は、翌日の深尾さんの電話で知った。

深尾さんは「派手に転びましたね、そのまま帰えられたので安心してましたが、大丈夫でしたか？」と言ったのだ。話しているうちに、その時の様子を思い出した。飲み会を終え、私と深尾さんと河野さんは永田町の地下鉄のエスカレーターを降りた。その時、私は重いリュックにバランスを失い前のめりに転んだのだ。逆にリュックがクッションとなり大事とならなかったが、何が「転ばないことが大切」だ、偉そうに！と、美佐子さんに御託を並べたことを再び悔やんだ。

もう一つ、有難くも恥ずかしいことであつたのは、転んだ私に真つ先に近づく、「大丈夫か」と手をさし伸ばしてくれたのが、85歳の先輩、河野さんであったことだ。

私はこの7月で80歳となる。振り返ると、これまで2回、派手に転んだ。最初は仕事のことだ。

今から45年前の冬、場所は川崎港。ドラマ人間模様のロケで古尾谷雅人の乗る競輪用自転車のカメラ前に異動させようと自ら乗ったのはいいが、まさに突然の突風にあおられ自らコンクリート面に落車させ転倒したのだ。競輪用自転車はブレーキがなく、ペダルに遊びもない、しかも一九〇センチの彼に合わせた

自転車のサドルは高く、追い風を受けた車輪は猛烈な勢いで回転し、ペダルは脚をはじき体を支えるのはサドルの上の股座しかない。

自転車は猛スピードで真冬の岸壁に突進する。そのまま海に落ちるか、ハンドルを切って前方横にあるロケバスに体当たりするか、それとも岸壁の手前でダイビングするかの三者択一、一瞬の判断で、私はハンドルを離し、サドルの股で踏み切り、コンクリートの地面に飛び込んだ。

顔面と両手肋骨に傷を負い、病院で手術治療後、現場に戻り仕事を続け、夜、乗客に好奇の目で見られながら、全身包帯姿の私はロケの終わった佐々木すみ江さんを小田急線成城のお宅まで送ったことを覚えている。送られたすみ江さんこそ迷惑だったに違いない。

30代の無鉄砲な転倒とは違い、2度目は8年前の春。十年来恒例にしている東北桜紀行、藤沢周平の故郷の山形県鶴岡。ライトアップされた城の桜を眺めた後、小説の主人公、三屋清左衛門を気取って居酒屋で名物民田茄子を肴に酒を飲み、ホテルに帰る途中で転んだ。妙に気分が高まり、歌など口ずさみながら速足で歩き、縁石に躓いて転倒、顔面を殴打したのだ。救急車で運ばれたが、幸い脳には異状なく（？）、2週間ほど眼の下に打撲傷が残る程度で済んだが、今度は奇矯な老人の転倒、その行動には今でも顔が赤らむ。

3度目の今回、大事に至らなかったのは、身近に知る人がいたことや体重50キロという身軽さがあつたからだ。改めて、足腰の弱つた老人の転倒は何時でも起きうることであることを再認識した。最近では、敷居に躓いたり着替えにふらつき風呂のガラス戸を割ったこともある。

どうすればいいのか？——転ばぬ先の杖、失敗しないよう準備することをいうが、極端に言えば、体力保持・足腰強化に励み、これまで通り活発な活動が続ける前向きな杖をとるか、酒を自重しつつ街中や仕事場などには近づかず、バリアフリー環境を整えた自宅にこもる安全自車の杖か、さあ、どちらを執るかである。贈賞式の日自分の無責任で軽率な発言に始まったともいえる今回の件は、己の終活にも絡む。

というところで、「はて？」、「誰か杖を必要としない助っ人はいないのか？」放送人の会を終活させてはなるまい、今後の会の存続を考えて急にそう思った。

放送人の会は、老人の愚痴話ではなく、若い人たちの闊達な話で盛り上げたい。  
(6月1日記)

\*\*\*\*\*

## 2024年度

### 放送人の会 総会

開催日時 24年5月25日（土）

午後1時30分から午後2時45分

開催場所 東京都千代田区紀尾井町1の1

千代田放送会館

出席社員数

総社員数 192名 出席社員数 115名

内訳 本人出席 31名

委任状出席 103名

総社員の議決権数 192個

出席社員の議決権数 115個

議長 会長 今野 勉

出席役員

会長 今野 勉

副会長 前川英樹、渡辺紘史、理事 石橋映里、石田研一小川和之

岡室美奈子、加賀美幸子、柏木登、木原毅、工藤英博、新山賢治、菅野高至、鈴木典之、鈴木嘉一、田中秋夫、永田俊和、深尾隆一、逸見京子、三原 治、村上雅通、八木康夫、矢島良彰、吉田賢策（24名）

監事 河野尚行、長尾展光（2名）

「議事の経過の要領及び結果」

議長は、開会を宣し、上記のとおり定足数にたる社員の出席があったので、本総会は適法に成立した旨を述べた。

議長は本総会開会に当たり、第11期事業全体の総括を行った。

（監査報告）

議案の審議に先立つて監事 長井典光より、監査報告書記載のとおり第11期事業報告及び計算書類、並びに本総会で審議される事項に関して提出された報告書類は適法かつ正確であることを認める旨の報告があった。

（報告事項）

第11期事業報告の件

総務委員長より、第11期（2023年4月1日から2024年3月31日まで）における、当法人の事業の状況につき詳細な報告があった。

（総務委員長・報告）

2023年度は、3年間に及ぶ新型コロナウイルス感染症が一定の落ち着いたを見せるなか、それまで大きな影響を受けて、縮小や延期、見直しなどを余儀なくされていた事業活動も少しずつ環境が整い、各プロジェクトのメンバーの強い思いと努力、それに加えて会員各位の協力・支援を得て、年度当初に予定されていた事業計画を予定通りに推進することができた。

正味財産増減計算書

2023年4月1日から2024年3月31日まで

| 一般社団法人放送人の会   |               | (単位:円)        |               |
|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 科 目           | 当年度           | 前年度           | 増 減           |
| I 一般正味財産増減の部  |               |               |               |
| 1. 経常増減の部     |               |               |               |
| (1) 経常収益      |               |               |               |
| ① 受取年会費       | ( 2,310,000 ) | ( 2,320,000 ) | ( △ 10,000 )  |
| ② 受取寄附金       | ( 2,137,687 ) | ( 2,232,176 ) | ( △ 94,489 )  |
| 受取寄附金         | 163,000       | 224,000       | △ 61,000      |
| 受取寄附金振替額      | 1,974,687     | 2,008,176     | △ 33,489      |
| ③ 事業収入        | ( 1,436,500 ) | ( 1,238,000 ) | ( 198,500 )   |
| 放送番組センター共同事業費 | 600,000       | 600,000       | 0             |
| イベント収入        | 336,500       | 138,000       | 198,500       |
| 放送人の証言        | 500,000       | 500,000       | 0             |
| ④ 雑収益         | ( 13 )        | ( 650,012 )   | ( △ 649,999 ) |
| 受取利息          | 13            | 12            | 1             |
| 雑収入           | 0             | 650,000       | △ 650,000     |
| 経常収益計         | 5,884,200     | 6,440,188     | △ 555,988     |
| (2) 経常費用      |               |               |               |
| ① 事業費         | ( 2,210,077 ) | ( 2,163,287 ) | ( 46,790 )    |
| 名作の舞台裏        | 236,790       | 262,083       | △ 25,293      |
| 放送人の証言        | 398,273       | 549,401       | △ 151,128     |
| 証言出版プロジェクト    | 1,350         | 5,334         | △ 3,984       |
| 放送人グランプリ      | 1,197,387     | 1,110,285     | 87,102        |
| ラジオプロジェクト     | 20,000        | 22,155        | △ 2,155       |
| NHK経営問題検討会    | 19,777        | 76,029        | △ 56,252      |
| イベント費用        | 336,500       | 138,000       | 198,500       |
| ② 管理費         | ( 4,049,964 ) | ( 4,265,328 ) | ( △ 215,364 ) |
| 給料手当          | 1,290,650     | 1,281,210     | 9,440         |
| 諸謝金           | 30,000        | 30,000        | 0             |
| 事務所賃借料        | 879,084       | 879,084       | 0             |
| 通信費           | 212,329       | 337,041       | △ 124,712     |
| 旅費交通費         | 502,382       | 461,058       | 41,324        |
| 会議費           | 44,000        | 173,980       | △ 129,980     |
| 印刷費           | 76,362        | 167,299       | △ 90,937      |
| 広告宣伝費         | 379,200       | 322,910       | 56,290        |
| 消耗品費          | 38,548        | 145,240       | △ 106,692     |
| 交際費           | 47,172        | 7,154         | 40,018        |
| 支払手数料         | 32,694        | 32,579        | 115           |
| 支払報酬          | 517,543       | 427,773       | 89,770        |
| 経常費用計         | 6,260,041     | 6,428,615     | △ 168,574     |
| 当期経常増減額       | △ 375,841     | 11,573        | △ 387,414     |
| 当期一般正味財産増減額   | △ 375,841     | 11,573        | △ 387,414     |
| 一般正味財産期首残高    | 1,393,339     | 1,381,766     | 11,573        |
| 一般正味財産期末残高    | 1,017,498     | 1,393,339     | △ 375,841     |
| II 指定正味財産増減の部 |               |               |               |
| 受取利息          | 158           | 175           | △ 17          |
| 一般正味財産への振替額   | △ 1,974,687   | △ 2,008,176   | 33,489        |
| 当期指定正味財産増減額   | △ 1,974,529   | △ 2,008,001   | 33,472        |
| 指定正味財産期首残高    | 19,572,208    | 21,580,209    | △ 2,008,001   |
| 指定正味財産期末残高    | 17,597,679    | 19,572,208    | △ 1,974,529   |
| III 正味財産期末残高  | 18,615,177    | 20,965,547    | △ 2,350,370   |

具体的事業活動として「名作の舞台裏」や「放送人グランプリ」などの事業を実施したほか、「放送人の証言」として新たに4名分を収録、「デジタルアーカイブプロジェクト」では証言の利活用を図るとともに、TBSメディア総研が発行する「調査情報デジタル」で、証言の抄録の連載を開始することができた。

また、年4回の会報発行を中心とする広報活動

動やラジオプロジェクトの「利き酒の会の会」の実施、「放送人句会」の実施など可能な限りの事業を積極的に推進した。

更にNHK問題検討会等は、「NHK経営計画(2024-2026年度)」に対する意見を提出し、放送法勉強会を開催した。また情報交換交流の環境としてコロナ後初めて放送人の会・懇親会を実施し会員相互の交流を深めた。

第11期（2023年度）事業報告

【事業】

1、『名作の舞台裏』（放送番組センターと共催）第53回「聖母モモ子の受難」（TBS）の実施（2024年1月20日）

2、『人気番組メモリー』・未実施  
3、『放送人の世界／人と作品』＋『ドキュメンタリーワールド』・未実施

4, 『放送人グランプリ』

第22回放送人グランプリ各賞  
および第9回大山勝美賞の贈賞

5, 『放送人の証言・収録』

河本哲也、関口恭司、太田直子、坂田信久  
の各氏（計4名）

6, 『放送人の証言・デジタルアーカイブプロジェクト』

① 上記「名作の舞台裏」で、堀川とんこう氏の「証言（映像音声）」を引用した新たな試みを行い、好評を得た。

② 3月からは賛助会員のTBSメディア総研が発行する「調査情報デジタル」で、証言の抄録の連載を開始した。

③ 収録された証言の文字起こしにNootaというソフトの使用を開始した。

④ i Uとの共同作業にはほとんど新たな進展はないが、昨年春にアップされたYouTubeとは、兼高かおる氏の証言が5.9万回の視聴数を得ている。

7, 『ラジオプロジェクト』

「ラジオ聞き酒の会」の開催

・2023年7月12日、

・1月12日「海を越えたシティポップ」

『放送人グランプリ2023』候補のラジオ番組を募集、投票。

8, 『情報交換交流』

懇親会、2023年9月30日（土）実施。

9, 『放送人句会』

2023年4月11日、6月13日、8月8日、  
10月10日、12月12日、2023年2月13  
日の計6回開催。会場は赤坂麦屋。

【広報】

1, 『会報の発行』

① 98号（2023年6月16日）放送人グランプリ2023贈賞式（5月20日）の報告。

② 99号（9月29日）消夏座談会（9月16日）

会員短信。

③ 100号（2024年2月10日）会員アンケート、  
下馬評座談会（1月24日）、第53回名作の  
舞台裏『聖母モモ子』の報告、鶴橋康夫さん  
を偲んで。

2, 『ホームページ』・適宜の更新。

3, 『フェイスブック』・有効活用の検討

【NHK問題検討会】

・「NHK経営計画（2024-2026年度）」に対する「意見募集」に応じ、放送人の会として意見を提出。（2023年11月1日）

・放送法勉強会『放送法を読んだことがありませんか』を開催、講師・立教大学砂川浩教授。  
（2024年12月11日）

【総務】

1, 『会議の開催』・総会・理事会ほか各種会議の設定および運営

2, 『経理業務』・予算・決算他、日常の会計業務

3, 『会議資料作成・管理』・各種会議の資料及び管理業務

4, 『賛助金申請』・放送文化基金など

5, 『各プロジェクト対応』・放送人グランプリ、「名作の舞台裏」「会報発行」ほか

6, 『総務一般』・事務局の運営含む日常的な事務業務

（決議事項）

第1号議案

第11期（2023年度）決算承認の件

総務委員長より、第11期決算報告書（2024年3月31日現在）の貸借対照表、正味財産増減計算書並びに個別注記表、財産目録について詳細な説明がなされた。

議長がその賛否を議場に諮ったところ、本議案は満場一致をもって原案どおり承認可決された。

（その他の議案）

・総務委員長より、今期事業計画と運営体制案及び理事会の日程案が示され全員了承した。

また「NHK問題検討会」は「放送をめぐる諸問題検討会」と改称して活動・展開してゆくことが示され全員了承した。

・会費滞納会員の退会について

定款「第7条」には、会費支払い義務を2年間履行しなかった場合は会員資格を喪失することとある。住所不明で複数年にわたり会費未納の連絡の取れない4名の長期滞納の会員については退会の手続きを執ることが提案され全員了承した。

また会費支払期限を毎年6月末日とすることも了承された。

最後に、2023年度に加入した会員が紹介された。

【総会後の2024年度第2回理事会・報告】

（決議事項）

1, 24年度（第12期）の事業計画及び運営体制について

24年度の各事業について計画と運営体制が示され、了承された。

（敬称略・あいいうえお順、傍線はプロジェクトリーダー。※印は非会員）

・「名作の舞台裏」『入気番組メモリー』

・渡辺紘史、石橋映里、柏木登、逸見京子、八木康夫

・「放送人の世界」『ドキュメンタリーワールド』

・今野勉、小池勝次郎、菅野高至、鈴木典之

・前川英樹、矢島良彰

・「放送人の証言・収録」

・「藤英博」石橋映里、芋原一善、小川和之

・吉田賢策、近藤邦勝、戸田桂太、矢島良彰

・「放送人の証言・デジタルアーカイブプロジェクト」

エクト（DAP）

・今野勉、深尾隆一、前川英樹、渡辺紘史  
・コアメンバー（岡田裕晃、木原毅、松田幸雄）

・「会報・広報活動」

・菅野高至、青木裕子、鈴木典之、田中典子、  
逸見京子

・「総務委員会」

・小川和之、深尾隆一（事務局長、吉田賢策

・木原毅、芋原一善

・「情報交換交流」

・木原毅、長井展光、中崎清栄、逸見京子、  
村上雅通、吉田賢策、渡辺紘史、※遠藤隆

・「放送人句会」

・深尾隆一

・「ラジオプロジェクト」

・田中秋夫、木原毅、永田俊和、三原治

・「放送人グランプリ・大山勝美賞贈賞委員会」

・「放送人グランプリ」

・渡辺紘史、石橋映里、岡室美奈子、小川和之、  
新山賢治、菅野高至、深尾隆一、三原治、八

木康夫、矢島良彰、山登義明、※松山珠美

（アドバイザリー委員）河野尚行、鈴木典之、  
曾根英一、中崎清栄、林健嗣、村上雅通

・「大山勝美賞」

・鈴木嘉一、石橋冠、内山聖子、次屋尚、  
八木康夫、若泉久朗、渡辺紘史

・「放送を巡る諸問題検討会」

・前川英樹、木原毅、河野尚行、今野勉、  
新山賢治、田中秋夫、長井展光、永田俊和、  
三原治、矢島良彰、渡辺紘史

以上、この総会・理事会の記事は正規の体裁の文書ではない。

\*\*\*\*\*



## 各番組のプロジェクトより

### 「放送人の証言」

収録プロジェクト チーフ 工藤英博

23年度収録した4人の価値ある「証言」を、収録順に紹介します。

#### 河本哲也さん

河本さんは1967年NHK入局。初任地の青森放送局では、テレビと同時にラジオの録音構成も手掛ける。テレビは「思惟性」を表現するのではなく「情報伝達」の手段であると考えようになり、後の制作において一貫した考えとなった。

72年東京の放送番組部へ配属、朝のワイドショーや『新日本紀行』などを制作。74年シルクロード取材班に選ばれ、「敦煌」、「トルファン」などを担当した。続いて「工曜レポート」「NHK特集」の担当を経て、90年NHKクリエイティブ設立に伴い、制作部長として出向。企画採択にあたっては、インタビュ能力の確認をはじめ各制作会社の専門性を重視した。同時に世紀末番組の企画開発を任される。

92年NHKに戻り「映像の世紀」の制作に取り掛かる。国際共同制作の枠組みや世界中の映像を集める作業など、多忙で困難を極めたプロジェクトだったが、番組の編集にあたっては、その時代の「空気感」、「臨場感」に徹することにして、激動の20世紀の本質を描き出すことに努めた。06年映像制作会社デムジンに移籍し、「家族と側近が語る周恩来」などのドキュメント・シリーズを手掛けた。

「初任地の青森で作っていたのは15分のローカル番組です。映像はスチールで、手回しの録音器を担いで取材し、同じテーマでラジオもやっていたのける時代でした。様々な人生模様が交錯する青森駅の待合室の人々や、農村地帯の人々の日常を取材しているうちに、ラジオの方が「伝達力」、「音の力」があるの

ではないか、と思い始めました。」

（担当…矢島良彰、荻原一善）

#### 関口恭司さん

関口さんは1961年NET（現テレビ朝日）に4期生として入社。大学在学中は「テレビドラマ研究会」を自ら作って活動していたので、映画部に配属されて欣喜奮躍した。しかし作品の検閲くらいが主な仕事だったので、辞表を出すも身元保証人に止められ、美術部でやり直し。いわば現場の底辺で様々なことを学んだ。

「モーニングショー」や、過激な中味だった「23時ショー」など幅広くこなしたが、証言では、後発局ならではの制作局の特異な雰囲気が生々しく語られた。

日本初の国産テレビチャー「土曜ワイド劇場」の開発担当として招集され、その第一作は77年の「時間（とき）よ止まれ」で90分枠だった。思わぬヒットも出たが、軌道に乗るまでは時間を要した。

2時間枠に拡大して79年に放送された「戦後最大の誘拐・吉展ちゃん事件」は視聴率26%を取り、実録犯罪ドラマの先駆的な作品となった。土曜ワイドの二代目チーフとなり「牟田刑事官事件ファイル」「西村京太郎トラベルミステリー」、「家政婦は見た」など多くのシリーズものを送り出した。

テレビ朝の成功を見て各局も2時間ワイドに参戦。ミステリー重視で音楽に工夫をこらした日本テレビの「火曜サスペンス劇場」を始め、TBS「月曜ドラマスパシヤル」、フジ「金曜エンターテインメント」と続いた。2時間ワイドはテレビの歴史を一時代変えたとも言える。土曜ワイドから生まれた「相棒」を連ドラとして見事に定着させた松本基弘Pには、作家に対する接し方のノウハウを助言した。制作

局長時代には、「ドクターX」の内山聖子さんやドラマ部長の三輪祐見子さんを中心に行った新しいドラマの開発や強化に尽力した。

「テレビ業界の若い世代に伝えたいことは、自分のアイデンティティをどうやって作るかだね。普通の会社と違って上司がどうだとか、派閥に入るとか、そんなことを考えていたらテレビの仕事は出来ない。今は多様で自由な時代、いろいろな職業がある中でこの仕事を選んだとしてもどこかで、もつと別の自分を生かす方法があるのではないかと考えていて欲しい。」

（担当…工藤英博、吉田賢策）

#### 太田直子さん

太田さんはフリーの映像ディレクターとして、2010年の「月あかりの下で」ある定時制高校の記憶など、教育問題をテーマとして記録映画の分野で優れた作品を制作してきたが、21年8月放送のE.T.V特集「玉砕」の島に生きて テニアン島日本人の記録」では放送文化基金優秀賞、ATP賞グランプリを受賞し大きな成果を上げた。また23年には同じE.T.V特集で「玉砕」の島に生きてへ2回サイパン島 語られなかった真実」が制作され、ギャラクシー賞選奨作品に選ばれるなど、映像ドキュメンタリー作品の創り手として確固たる実績を上げてきた。

テニアン、サイパン関連の太田さんの取材は30年に及ぶ。亡くなった方々の遺族や奇跡的に生き延びた方々との交流を重ね、信頼関係を築いてきた。日本軍の信じがたい暴挙の果てに家族を殺める体験や自死の記憶を人々が太田さんのカメラの前で語る。追いつめられて親や家族を銃で撃った体験など、悲惨な記憶を語る重いことはが胸を突く。番組のナレーション担当も含めて、太田直子さんの30

年に及ぶ取材の成果が貴重な証言記録として残された。

「高校3年の時に出会った政治経済担当の沼野鹿之助先生は、学徒出陣の経験者で授業では多くの印象的な戦争体験を話してくれました。」

『高射砲の撃ち手になって撃墜した戦闘機が落ちていく。その米軍機の窓に自分と同年代の若い兵士の顔が見えて、とても辛く悲しい思いをした。自分は彼にはなんの恨みもないのに……』

戦争って何だろう、私は戦争の中身や不条理をもっと知りたいと思うようになりました。」

（担当…戸田桂太、工藤英博）

#### 坂田信久さん

坂田さんは1962年日本テレビ入社。報道部運動課に配属。当時は巨人軍のプロ野球、力道山のプロレス、帝拳ジムのボクシングなどの中継が盛んで「スポーツの日本テレビ」と言われていた。「新入社員は箱根駅伝の取材をするべし」との会社の方針でニュース取材し、順天堂大の祐佐監督と沢木選手の信頼と熱情などを知り深い感銘を受ける。

『箱根駅伝を中継したい』という思いは募り、先輩たちに話しても当時はテレビの中継など技術のノウハウもなく「そんなことは無理」と一蹴されるばかり。84年入社同期の大西一孝TDに相談、「不可能に挑戦するのは面白そうだ」と技術部内の調整は、大西さんが請け負ってくれることになった。箱根山中に足しげく通い、一子山、駒ヶ岳などを中継基地に決める。何度も退けられた企画は86年6月の役員会でようやく認められ、中継番組がスタート。89年に全コース完全中継が出来た時には視聴率20%を超えた。制作と技術の一体感がな

ければ成功しない大事業だった。

他にも「全国高校サッカー選手権」、「世界陸上」、「横浜国際女子駅伝」などの番組をプロデューサーとして企画し育成に努めた。たぎる情熱と高い見識を持たれる坂田信久さんは、日本のスポーツ界の発展のために計り知れない貢献を果たされた。『第一回日本スポーツ学会大賞』など多くの賞を受賞。

「入社当時はスポーツ局ではみんなプロ野球のディレクターになるうと思っていました。しかし、今の花形は箱根駅伝のチーフディレクターです。嬉しいことです。私が退職の際に後輩に託した3つの約束事は、①テレビ中継が箱根駅伝を変えてはいけない。②歴史を大切に、チームと選手にエールを送る放送を。③中継しているのではなくて、させて頂いている感謝の気持ちを持つて。」

(担当：柏木登、工藤英博)

## 第10回を迎えた大山勝美賞

鈴木嘉一

「日韓中テレビ制作者フォーラム」は2001年、日韓の放送関係者が歴史認識問題で激論を交わしたのが始まりで、第3回から中国も加わった。テレビドラマのプロデューサーと演出家を兼ねた大山勝美さんは、「放送人の会」の代表幹事や特別顧問としてこの運営の中核を担い続けた。

大山さんは14年9月、横浜市で4日間開催された第14回フォーラムにも通しで参加した。3日目の最後に広島を舞台にしたNHKのドキュメンタリードラマが上映された際、満州(現・中国東北部)や日中戦争の表現をめぐって中国・韓国側から厳しい批判が相次いだ。中国勢が記念の写真撮影をボイコットし、

会場全体が重苦しい空気に包まれる中、事態收拾のため中国側と粘り強く対話を重ねた大山さんの姿は今でも印象深い。それだけに、10月に入って多臓器不全で急逝したという訃報には驚かされた。82歳だった。

後に知ったことだが、腸閉塞で入院を繰り返していた大山さんはその半年前、「日韓中のフォーラムと後進のために使ってほしい」と5000万円を当会に寄付していた。大山勝美賞はこの基金で制定された。

今年は大山さんの没後10年であり、大山賞が第10回を迎えた節目の年に当たる。

大山賞選考委員会の初代委員長となった演出家の石橋冠さんは当時「放送人グランプリはすべてのジャンルから優れた作り手や番組を選ぶ。大山さんは一貫してドラマを作ってきたので、この賞は60歳以下のドラマ制作者を対象とする」と賞の性格を説明した。

私は石橋さんに頼まれて、第2回目から選考委員を務めている。2代目委員長の八木康夫プロデューサーの後を継いで今回、委員長を引き受けた。委員は石橋さん、八木さん、放送人グランプリ贈賞委員長でもある渡辺絃史・当会副会長、NHK出身の若果久嗣さん(KADOKAWA執行役員)のほか、新たにテレビ朝日の内山聖子プロデューサーと日本テレビの次屋尚プロデューサーが加わった。2人とも、大山賞の受賞者である。

大山賞では毎回、原則としてプロデューサーとディレクターを1人ずつ選んできた。第10回までの受賞者は計20人に上り、男女別では男性が11人、女性が9人である。所属別では、NHKエンタープライズも含めたNHK関係が7人、テレビ朝日と日本テレビが各2人、TBS、関西テレビ、民放ローカル局、WOWOWが各1人、フリーを含む制作会社が5人となっている。

個人賞なので、これまでの実績を視野に入れ、最近の成果や将来性をトータルに評価する。受賞時の年齢は30代から50代とまちまちで、新鋭と中堅、ベテランが混在しているが、できれば「先物買い」をめざしたい。

例えば、昨年受賞したフジテレビの「silent」の風間太樹ディレクター(AOIRO)は大山賞を受けた後、この連続ドラマでATP賞、ドラマ部門最優秀賞、エランドール賞特別賞、橋田賞などに輝いた。また、もう1人の受賞者である小田玲奈プロデューサー(日本テレビ)もその後、連続ドラマ「ブラッシュアップライフ」が放送文化基金賞奨励賞、ギャラクシー賞選奨、ATP賞総務大臣賞・優秀賞、東京ドラマアウードの連続ドラマ部門グランプリなどを総なめにした。

第10回を迎えた今回は、新たな顔ぶれも交えた選考委員会となった。各委員から事前に候補者を推薦してもらい、計8人の名前が挙がった。2時間近くの議論を経て、NHKエンタープライズの家富未央プロデューサーとフリーの松本佳奈ディレクターに決まった。2人とも女性というのは第2回以来だった。

賞の価値は受賞者たちのその後の実績によって高まる、とよく言われる。大山賞の受賞者リストを見ると、活躍している人が多い。選考委員会としては、作り手たちがこの受賞をきっかけにさらに飛躍するよう望んでいる。

~~~~~

## 第19回「ラジオ聞き酒の会」実施報告 〜東京FM「海を越えたシテイポップ」

田中 秋夫

「放送人の会・ラジオプロジェクト」は定期的に開催している「ラジオ聞き酒の会」を

1月17日(水)に東京FMの会議室で同局制作の特別番組「海を越えたシテイポップ」(2023年9月21日放送)をテーマに話合った。この番組は、今、海外で日本人アーティストの山下達郎、竹内まりや、大貫妙子、イエローマジックオーケストラ、吉田美奈子、八神純子、大橋純子、角松敏生などのヒット曲が人気があるという。特定のアーティストではなく、シテイポップという日本の音楽ジャンルとして注目されていることに何か理由があるのかを探っている。

パーソナリティを務めるのは、ジャーナリストの佐々木俊尚氏。取材対象はニューヨークにある日本のレコードショップ、「フエイヌ・レコード」の店長 間宮祐一氏や「シテイポップ 1973 から 2019」を監修したライターの松永良平氏。昨年、「シテイポップとは何か」を刊行した音楽評論家の柴崎祐一氏、海外で活動するDJ、ヴァン・ボーガム氏等にも話を聴きながら、日本のシテイポップームを紐解いていく。

「なぜ日本のシテイポップは海外で受け入れられるのか」というテーマに参加者一同、興味深く聴くことが出来た。

(注：100号に掲載予定でしたが、編集担当のミスで本号の掲載になりました。申し訳ございません。)

☆ ☆

## 訃報

松尾 羊一 (まつお よういち)

2月22日に逝去、94歳。本名：吉村育夫。一九三〇(昭和5)年、東京都旧京橋区入舟町生まれ。53年早稲田大学卒。文化放送入社、主に社会教養番組のディレクターとして、『ズ

リ山に育つ子ら』ある捜索願ひ(民放連朗優秀賞)『この十年の記録』(同最優秀賞)などを制作。『25時の討論会』と『ニューヨーク・ホストライン』でギャラクシー選奨。その後、放送評論家としてコラムを多数執筆。

「放送人の会」設立メンバーの一人になり、幹事・理事、特別顧問などを務めた。また、会報の編集長を01年4月の第8号から第45号まで約10年間務めた。

15年、ギャラクシー賞の志賀信夫賞を受賞。著書に、『てれび徒然草』『ラジオ・グラフィティ』『テレビは何をしてきたか』『ブラウン管のなかの戦後風俗史』『てれび遊歩道(一)(二)』(1990-1995/1996-2000)『テレビドラマを「読む」―映像の中の日本人論』ほか。

☆ ☆

## ムラさんー有難ございました

田中秋夫

二〇一八年11月発行の「放送人の会」会報に吉村育夫さん(筆名・松尾羊一)の「我が自伝くまだはもうなり、もうはまたなり」との一文が掲載されている。築地の魚河岸の仲買人の家庭に生まれ、戦時、戦後の昭和を生きてきた様子が語られ「百歳まで『やけ生き』して世の中の悲喜劇ぶりを眺めてみることにしますか」と結んでいる。その吉村さんが先日亡くなられた2月28日に葬儀がおこなわれた。享年九四歳だった。

吉村さんは文化放送時代、私の10歳年上の先輩だった。私が入社した東京オリエンピックの64年の頃、吉村さんは制作部の社会教養班のディレクターで「日本の子供」シリーズ等、数々の録音構成番組を作り、賞レースで受賞を重ねていた。当時、社教班の人たちはどちら

かという気難しいキャラクターが多い印象だったのだが、吉村さんは「ムラさん」の愛称で親しまれ、毎晩のように缶を重ねていた。オリンピックが終わりテレビが普及した結果、ラジオの営業が苦しくなり、制作費の削減や人員の合理化が検討されるようになった。

その結果、ラジオ業界にアメリカのラジオ編成理論が導入され、「生ワイド番組」が中心の編成に変化していった。その結果、ドラマや録音構成等の金と時間が掛かる番組は急速に少なくなった。

その頃、吉村さんも社教班から編成部へ異動させられていた。その吉村さんが編成部時代の78年に出版され松尾羊一名で書いた「ラジオ・グラフィティ」放送局の24時間」という単行本がある。その序章に「放送とは何かといわれたら、それは青春であると私は答えることにしている。私の『青春』はさまざまな意味を含めて、この四谷村ではじまり、終わろうとしている。ああ四谷村放送局よ。私はこの局が好きだ。ここで働く現場の男としてそう言い切れることは幸せだと思っている。『好きだ』といった。それは愛社精神とかいったものではモチロンない。どちらかというと不良社員かはみだし社員、あるいは『浮浪雲』局員に近い私が、24年間、この大変な歳月を過ごしたという『事美』をいとおしく思っているだけである。」と書いている。

確かにムラさんは定年まで編成部に所属していたが、社内の仕事はほとんどせず、筆名の松尾羊一で外部の仕事が多かったように思う。従って社内での彼は「浮浪雲」的に陰口を叩かれていた。しかし、二〇一〇年頃、そのムラさんから私に「田中君、『放送人の会』という放送が好きなたちの会があるのだが、入らないか?」との誘いがあった。私は当時「放送人」という表現に違和感を抱いていた。京都大学

人文科学研究所の加藤秀俊教授が「現在、『新聞人』という言葉はあるが、『放送人』という言葉は存在しない」との言葉に私は拘っていた。彼は社会字の権威であり「メディア」として新聞に比べて放送のジャーナリズム性が希薄である」と言いたかったのだと思われる。

その為、私はムラさんの誘いにも関わらず「放送人の会」への入会を逡巡していた。

しかしその後、「放送人の会」会長の今野さんが会報に書いた「放送人という言葉を作った人」として「知の巨人・梅棹忠夫さんが戦後に発生した放送に携わる新しい職業集団を『放送人』と言っ」を読み、「放送人」の言葉が存在することに納得して11年6月「放送人の会」に入会した。

あれから10数年が過ぎ、現在も当会の活動を楽しみ続けているが、ムラさんからの誘いがあったお陰だと感謝している。「ムラさん、『放送人の会』へ勧誘していただき有難うございました」と言いたい。

☆ ☆

## 松尾馬笑さんを使おう

放送人句会幹事 深尾一化

「松尾」といえば、俳句の世界では「芭蕉」と来るのが当たり前ですが、そこを「馬笑」と洒落たところが松尾羊一さんの真骨頂だったと思います。

現在放送人句会の幹事を務める私は、馬笑さんと句会を一緒にすることがありません。今となってはそれが残念で残念で仕方がありません。諸先輩のお話では、彼の軽妙洒落なお人柄と温かい眼差しで、さぞ素晴らしい句会であつたらうと悔しくも押しはかるしかありません。

放送人句会第一回の案内を引用します。当時の会の顔ぶれと、その雰囲気を感じさせる文章です。二〇〇七年のことです。

### 謹啓

放送人の会 俳句会 お知らせ

かねてより「句会の要望がありました」、すでに俳壇では知られ、NHKBBS句会では常連である西川章さん(阿舟)の入会を機に発足することになりました。よつするに「マネタを酒宴に一献の夜という趣向。

日時:3月27日(火)

場所:麦屋(赤坂Rasそば)

会費:8000円

献題:燕・踏青・春雨その他自由

5句投句。

さしあたり今回は下記の方々に連絡させて戴きました。

石橋冠、石井清司、伊藤雅浩、堀川とんこう、大山勝美、今野勉、田澤正稔、松尾羊一、中澤忠正、中村美美子、新村もとを、鶴橋康夫、下重暁子の皆さん順不同。

格式はつた句会ではありません。奮つてご参加を…

\*玉句は会報誌上にお披露目いたします。

記 松尾

馬笑さんは二〇一三年の第38回までに百九句を残されました。勝手ながらその中から私の好きな句をいくつかを「紹介して、ご冥福のお祈りに替えさせていただきます。

(白曇)

第一回(2007年3月)

空を切る燕の群れに嫉妬して

くさめして踏青早き酒二合

第三回(2007年7月)

虹立つや少年の頬赫く燃え

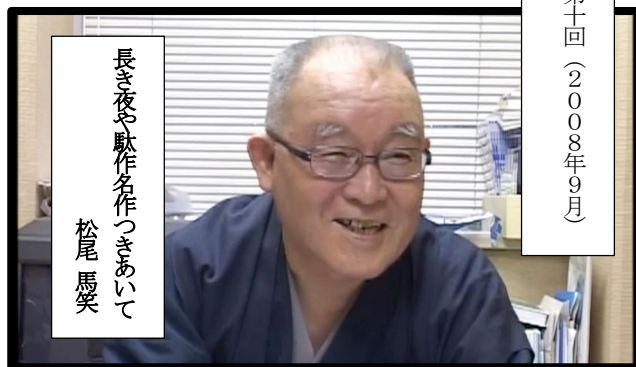
第四回(2007年9月)

第五回 (2007年11月)  
秋刀魚食みほろ苦き世や喜寿の膳  
落葉焼くついでにふみ焼く己かな  
年ふるゝ箆筒で泳ぐ鯉職

第九回 (2008年7月)

夕立や台本を頭に逃げまじふ  
一斉に本読みですか燕の子

第十回 (2008年9月)



長き夜も駄作名作つきあいて  
松尾 馬笑

第十一回 (2008年11月)

風や企画書きあげ友は辞め

第十三回 (2009年4月)

ガリ切りの同人集い花見哉

第十四回 (2009年6月)

みぎひだり日傘が揺れる老いの坂

第十六回 (2009年10月)

灯を消して無明の闇に秋の声  
視聴率アステリスクや秋の星

第十七回 (2009年12月)

捨てカッパ集めて描く年の暮  
極月や刻むいのちの総ざらひ

第十八回 (2010年1月)

者癡りに震へ手添ゆる傘寿哉  
煮こりの味に譬えるドラマかな  
第十九回 (2010年3月)

春雷やその一閃に盃ゆれて  
春の雷聞えぬ妻に目立つしわ  
第二十一回 (2010年7月)

世渡りも浮き沈みあり冷奴  
葉の裏に空蟬ゆれる夏の夕

第二十二回 (2010年9月)

廢線にコスモス揺れる能登路かな  
第二十六回 (2011年5月)

緑映え園児もはしやぐ衣更え  
坪庭に薔薇一輪の重さかな

第二十七回 (2011年7月)

打上げや箸のあつまる初鯉  
足すくむ野猫の道や薔薇の刑

第二十八回 (2011年9月)

夏近しともかくにも打上げぞ  
薄絹の老女と仰ぎ席ゆずる

第二十九回 (2011年11月)

地異の果て案山子の弓矢誰ぞ打つ  
蟬螂や背の君食んで瞑目す

第三十回 (2012年1月)

だめ出しに助監もすねる冬の暮  
漕ぎ手にも一夜の夢を宝船

第三十一回 (2012年5月)

夏祭り竹馬の友の老いにけり  
そこかしこ脇役の顔夏の雲

第三十二回 (2012年7月)

積ん読が枕がはりの晩夏かな  
雲乱る老いを鞭打つ晩夏光

第三十三回 (2012年9月)

ライト消し闇のあかりに秋気満つ  
箱買ひの松茸まづは写すなり

第三十四回 (2013年5月)

夏祭カメラがゆれて撮り直し  
夏風が帽子をさらひ撮り直し

## ☆ ☆ 松尾羊一さん追悼

市川哲夫

松尾さんとは、私が「調査情報」編集長時代のお付き合いが印象深い。

自身文化放送のご出身だったので、放送現場の何たるかを知悉された上での放送評を書きになられた。

私の制作したドラマも、何度も批評されたが、時として私の意図とは違う批評をいただいた事もあるが、なぜか腹は立たなかった。どこか洒落な、江戸っ子的な感性を感じた。昭和ヒトケタ世代の放送人としてのスピリットを最期までお持ちだった。

来年は放送百年を迎えるが、その大半の変遷を知る松尾さんが亡くなられたのは残念である。大きな転換期を迎えている放送の世界だが、AIに取って替られるような人間不在の番組だけは、御免被りたいと思っている。それこそが、松尾さんのご遺志ではなかったかと拝察している。

## ☆ ☆ 昭和の陰翳礼讃

——松尾羊一さんを悼む

鈴木嘉一

小田急線の世田谷代田駅で降りるのは初めてだった。改札口を出ると、雲一つない青空の下、線路の彼方に真っ白な富士山が目に入った。

世田谷区では富士がこんなにも近くて、大きいのかとしばしば見とれた。松尾羊一さんの告別式について「家族葬ながら希望者の参列は

可能」と聞き、葬儀場に向かった2月28日昼のことである。放送人の会からは、今野勉会長をはじめ何人もの会員が足を運んだ。

文化放送時代に放送批評を書き始めた吉村育夫さんは、この本名では差し障りがあるとして、「松尾羊一」というペンネームを使い続けた。コラムでは「鷹蛾蝶（えんがちよう）」と名乗るケースもあった。これは察するに、明治、大正、昭和の三代を生き、「江戸学の祖」とも呼ばれた在野の研究者・三田村鷹魚（えんぎよ）と、昭和の子供たちが不浄なものに触れた時にはやし立てた「エンガチヨ」という俗語から付けたと思われる。自らを「長屋の「隠居」に擬した松尾さんは、鳶魚に私淑していた節がある。

放送人句会では「松尾馬笑」と称した粹人に今回、もう一つの名前が加わった。「松壽院日羊信士」という日蓮宗の戒名は、ペンネームから二文字が取られている。松尾さんはあの世でも、江戸の戯作者や浮世絵師のようにいろんな名前を使い分けるのだろうか。

告別式であいさつした長男の吉村太郎さんによると、松尾さんは昨年4月、大腸がんによる腸閉塞のため2か月間入院した。11月に再び腸閉塞を起こし、ホスピスに入った。医師からは「年内にお別れかもしれない」と告げられたが、年を越した。2月22日、ふだんより多めに朝食を取った後、眠るように息を引き取ったという。

「テレビドラマではよく親族に看取られるシーンがあるが、父はそういうのは好きではなかった。息子が3人いるのに、1人で旅立つたのはオヤジらしいと思います」

松尾さんは野球が好きで、「ホラーズ」という草野球チームの投手を務めた。山なりの超スローボールを投げ、メンバーが足りないとい息子たちが駆り出された話も披露された。

太郎さんは「酒は飲みたいだけ飲み、タバコも吸いたいだけ吸った。それで94歳まで生きられたのはすごいことです。父は照れると思いますが、出棺の時には拍手で見送ってくださ」と締めくくった。

会場では、着物姿でほほ笑む遺影とともに、著書の『テレビ遊歩道』2巻(2001年)や、毎日新聞に長期連載された放送時評のコラムなどが展示されていた。アルバムには、放送人の会が韓国や中国と持ち回りで開催してきた「日韓中テレビ制作者フォーラム」のスナック写真もあった。このフォーラムに参加し続けた松尾さんのホテルの部屋は「松尾バー」と呼ばれ、夜な夜な酒盛りの場と化したのも、懐かしい思い出である。

私は放送専門誌「GALAXY」の2013年9月号で松尾さん、元日本大学芸術学部教授のこうたきてつやさんとともに「批評は放送文化を変えたか」と題して、鼎談をしたことがある。

〈こつたき 僕の批評はレトリックですよ。松尾 僕もそうですよ。手品みたいなことやつてます(笑)。

こつたき じゃ、松尾さんの批評軸って……。松尾 ないですよ。

鈴木 松尾さんには独特の芸風があります。それぞれが勝手なことを言っている議論はあまり深まらなかったが、番組の制作者を想定して書いている点では一致した。松尾さんは、最も意識している作り手として演出家・作家の久世光彦さんを真っ先に挙げた。

松尾さんの著書の一つ『テレビドラマを「読む」——映像の中の日本人論』(2002年)に、TBSの「向田邦子新春スペシャル」シリーズを論じた「久世光彦が刻印した『昭和』の陰翳礼讃」という小論が収録されている。「陰

翳礼讃」とは、谷崎潤一郎のあまりにも有名な随想風評論の題名である。

向田邦子シリーズの時代背景は昭和10年代、舞台は池上本門寺界隈の中流家庭という設定について、松尾さんは「雑駁に言えば、まだ東京という都会が橋と坂で成り立っていたところである」と書いた。「東京は橋と坂の都市」とは、生まれも育ちも東京の下町ならではの、鋭い指摘に違いない。

「広大な関東台地が古状に伸び、台地の上や下をぬつて電車が走った。一帯を山の手俗に「ノテ」と呼んだ。物語のノテは大坊坂(だいはうざか)、正面参道に此経難持坂(しきょうなんじざか)、朗師坂(ろうしざか)、車坂、妙見坂と並ぶ本門寺界隈である。

対照的に筆者の私は「河の者」だった。多くは運河だが、潮風の匂いで育った者たちの界限を下町といった。その河の年少者たちが憧れた山の手、洋館、セラー服の少女、昭和のこころの原風景、下町の娘たちも市電(市電線(茅場町)渋谷)に乗って、赤坂や麹町台地にひしめく私立女学校に通ったものだった。それが私にとつての「向田邦子新春スペシャル」だった。

そして、19作に及ぶこのシリーズを「明治の憂愁を昭和に転送した、テレビドラマ史における映像の刻印、あるいは、早すぎる昭和晩年を陰翳礼讃で隈取った劇」と評した。

松尾さんは「放送物書き屋」とも自称したように、輻晦趣味があつた。「批評は他人の作品をダシにして自分自身を語る行為」とするならば、松尾さんは番組評をとおして「昭和の陰翳礼讃」を書き続けたような気がする。

## 千葉邦彦

松尾羊一さんは、私を『発見』してくれた恩人である。松尾さんは私の論考を評価してくださり、ものを書く広いフィールドへと私を送り出してくれたのだ。それはこういうことだった。一九八六年三月、放送の専門誌である月刊『放送文化』が衣替えした新雑誌、季刊『新放送文化』(発行：日本放送出版協会) 創刊号は「第1回『放送批評』原稿募集」を実施した。放送批評というジャンルに、決まりきった少数の既成の評論家以外の「新しい風」を求める企画であつた。当時私は本業である予算編成の仕事の傍ら、広報誌『ネットワークNHK』労働組合の機関誌、職員採用パンフレットなどにメディア論の原型のような文章を断片的に書いていたのであるが、この原稿募集は私の執筆意欲を猛烈に掻き立てた。折しも売り出された本格的なワープロを買って、一気に書き上げた。

応募してしばらく経ったある日、仕事中に編集長からの電話を受けた。「この度はご応募ありがとうございます。審査の結果、千葉さんの論文が最優秀に選ばれました。おめでとうございます」 「ありがとうございます」 「どうか？」 「え、千葉さんお一人です」。それはもう飛び上がるほど嬉しかった。帰りの山手線では、床から足が浮いているようだった。

第2号誌上で選挙結果が発表された。「応募総数57編。本誌依頼による選考・松尾羊一氏(放送批評家)により厳正な選考が行われた結果、最優秀論文1編と優秀論文5編が決定した」とあり、松尾さんの選評「参集した放送批評の新しい風、生活のことばで語った批評群」に続いて、私の最優秀論文『緩

い連結』から『水を打ったように楽しそう……?』まで、放送批評のためのプロローグ」が全文掲載された。松尾さんは粗削りの拙稿を、「テレビを個別メディアで括る時代の終焉と、多メディア状況下のテレビの出現の意味を捉えている」と評価してくださった。

この号を読み返すと、執筆者やシンポジウム登壇者が多士済々であることに驚く。特集1「ザ・ヒットメーカー」86には伊丹十三、野田秀樹、林真理子、筑紫哲也、秋元康、早坂暁、横澤彪ほか。特集2「ディク・オフ文字放送」には岡崎栄、大山勝美、相田洋、村木良彦。他の記事では藤井潔、平野次郎など。そのなかに自分の名前があるということが、恥ずかしくも誇らしかつた。放送センター1階の書店に平積みされた掲載誌を何度も手にとつては、自分の頁を確認した。

その年末、編集部主催のパーティーで初めて松尾さんに挨拶し、御礼を申し上げた。やがて私は、特別寄稿を経て、同誌にコラムを連載するに至つた。書く機会はさらに増えてゆく。89年、農会長の高比ジョン特プロ経由で郵政省ハイビジョン推進室の一員となり、『情報通信ジャーナル』『電気通信』などに、また、91年からのニューヨーク勤務時代には『月刊ニューメディア』にも。しかし、そうした活動について松尾さんに直接報告する機会がないまま時間が過ぎていった。今世紀に入り、たまたま立ち寄った銀座のバーで松尾さんを見つけ、十数年ぶりにお話しした。さらに時を経て、17年、放送人の会で2度目の再会を果たした。この2つの再会のことは、いつかまた書きたい。今私がこうしている、その最初のきっかけを与えてくださった松尾さんがいなければ、私の歴史はだいぶ違ったものになっていただろう。

## 恩人・松尾羊一さんを偲ぶ

☆ ☆

松尾さんへの感謝を忘れず、いつまでも大切に思うと誓う。

☆ ☆

## 「松尾羊一さん」を読む

菅野 高皇



右の表紙は、一九八四（昭和59）年8月20日発行の『てれび徒然草』。松尾さん54歳の時の本です。出版社は「日本放送出版協会」、定価千二百円。当時の物価からして、決して安価では無い。帯にあの和田勉の意句がある。だが松尾さん、あまりコピーはウマくはない。

『松尾羊一さんはいくつも仮面を持っていて、一筋なわけはいかないのです。テレビというものを、斜めから真上から、女から男から、そして何よりもウラからは決して見ない羊一さんの硬骨の月光仮面ぶりに、賛嘆、三読。』カバ―絵は馬場ひさしさんで、猫好きの松尾さんらしく、猫がテレビを見ながらウイスキーを飲んでい。裏表紙では、肘枕でうたた寝する傍らにサンングラスがある。

そして、カバ―の折り返しにダンディーな松尾さんの写真がある。『現在、文化放送視聴者センター部部長』の近影かどうかは分

らないが、いかにも業界人っぽく、お洒落である。



「てれび」をめぐるを私小説風エッセイには、3人の息子・タロー、ジロー、サブローとカーさんに私とネコ・シロー、ゴロー。そして「てれび」も我が家の構成員、同居人にある。と「テレビ」または「TV」と書く、ドラマ論だ作品論だ、編成論だ技術論だとなつてしまい、「みる側」と功罪論が中心で『子どものお守りをさせないで』となるから、ごく自然体な「てれび」がその名にふさわしい、松尾さんは思っていた。

古老中古新品同様を含め現在五人（巨いて誰かがつけつ放しになっている。社会の窓というよりは、ぬくもりをもった同居人に近い。「この同居人とわが家の住人たちの関係がわからない」と呟いたら、『放送文化』の編集部が「分からない関係を分かりやすく書いて下さい」と唆され、79年の春から84年の初夏まで『てれび・ちやのまろじい』を連載することになる。

40年前に、テレビと家族を巡る悲喜（こも）を綴った『てれび徒然草』は、将来というか、程なくしてと言おうか、『昭和世相史』の史料として研究の対象になるに違いない。松尾さんが目指した「テレビ民族学」に繋がるか否かは神のみぞ知る、である。

だが、流れて消える放送を己が家族をダシにしてせき止め、定着させようとする…勇敢

な『放送物書き屋』は、確かに存在したのである。敬意を込めて『「隠居」と呼ばせて頂いた。

「テレビ遊楽道II 1986―2000」の「おわりに」で、テレビは絵画や舞台のように、作品世界に絞り込んで、切り取る作業のみでは核心に届かない。「手の間から」ぼれ落ちてしまつてテレビのサムシングとはなんでしょう。か…。」

テレビ評論の無力さを感じて十数年、「厄介な存在、それがテレビ」で、「現実の虚構化、虚構の現実化」がテレビかも知れない、という。

記憶では、松尾さんに勧められて放送人の会に入会している。それがいつ頃だったかは分からない。二〇〇三年7月発行の会報16号から会員名簿が掲載されていて、それに私の名前が載っている。

入会の動機は単純で、ラ・テ欄に番組評を書いている評論家先生に誉めて貰いたい一心で、誘われるままに入会したのだ。とは言っても松尾さんに何をどういう風に誉められたのかは正直、記憶がおぼろなのだ。放送に関わる者の性分で良いことも悪いことも直に忘れて、明日に備えるから、記憶はおぼろになる…。



今回、松尾さんの「テレビドラマを『読む』

「家族の中の日本人論」(2008年1月31日発行)を読んで少し記憶がぼぐれてきた。

と同時に疑問もわいた。どうして松尾さんの評論には、脚本や演出の名前はあつても、制作者である、私の名前が無いのだろうか。

(以下、次号に続く)

\*\*\* \*\*

## 第94回放送人句会

令和六年二月十三日（火） 於 赤坂・麦屋

出席 中村フミ 林備後 佐々木光野 近藤

久仁 深尾一化 松田幸雄（以上六名

兼題 梅一切 水菜 余寒

（業東用語） 本読み（詠み合はせ）

一化 待たれて密かに去りぬ梅の花  
光野 身ぢろぎなし古書店主にある余寒  
幸雄 本読みの朱の棒線よ春の雨  
久仁 稽古場に梅の花びら読み合わせ  
久仁 手術室白梅薔めく無影燈  
フミ 朝まだき窓に貼りつく余寒かな  
一化 ルビなぞる子役本読み春浅し  
フミ うづくまる鳩啼く声にある余寒  
光野 句座佳境麦屋の納屋にある余寒  
光野 妙齡の佳人をらぬも梅の花  
フミ 尾の先に余寒丸めて猫眠る  
久仁 海鳥が一羽で潜る余寒かな  
フミ 本読みを終へ春時雨音もなく  
幸雄 送別の鍋の水菜の残りけり  
フミ 紅梅やラヂオ体操時間です  
一化 本読みや数を重ねて凍解くる  
幸雄 神田川口遊ぶまま水菜切る  
フミ 本読みの声立ち上がる春隣  
一化 京菜てふ自慢に堪へて又ひとつ  
一化 ほぐれぬは残る寒さよ胸のうち

絵画展帰路に見つけし梅一輪  
梅林に迷ひて遊ぶゴッホかな  
松本に熱きタクトを振り余寒  
水彩添へ若草色の朝餉かな

幸雄  
幸雄  
光野  
フミ

## 第95回放送人句会

令和六年四月九日(火) 於 赤坂・麦屋

出席 中村フミ 林備後 佐々木光野 近藤

久仁 深尾一化 松田幸雄(以上六名)

兼題 春の雲 山葵 春愁

(業界用語) ナメ(あるいはナメる)

盃の面がすかに揺れて春の雲

一化

赤い靴少女見上ぐる春の雲

光野

春愁を払ふ気概の股のぞき

備後

色あせし写真束ねて春愁ひ

幸雄

春愁や結び目解いてまた結び

一化

春愁やデジタル嫌ひ極まれり

フミ

ゆつたりと手足のばして春の雲

備後

八百円珈琲味はひ春の雲

幸雄

襟足をなめて見とる花見かな

一化

春愁の河原に下りて手を洗ふ

備後

春愁や世話焼き女房五十年

フミ

小さき橋緑に染めて山葵沢

フミ

奥州路山葵を効かせジビエ食ふ

光野

アナログで心通はせ春の雲

フミ

行く春や「ナメ」とは

備後

「ナナメ」と解すべき

久仁

春愁や坂の上の雲読み終へり

フミ

一升瓶ナメの横顔春の宵

備後

春愁の結び解けてまた結ぶ

フミ

春愁や蓋してもなほメランコリー

フミ

春の雲寝そべる猫に姿変へ

一化

行く末の見えぬ揺らめき春の雲

一化

D J ポリスナメて高架と春の雲  
春の雲伍チユーハイならいいだらう  
エンディング2S ナメの臘月  
山葵沢天城の風も流るるや  
春愁を気取り手酌でもう一杯  
春愁や一合にとどむ紹興酒

久仁  
久仁  
幸雄  
幸雄  
一化  
幸雄

## 第96回放送人句会

令和六年六月十日(月) 於 赤坂・麦屋

出席 中村フミ 林備後 佐々木光野

深尾一化 松田幸雄(以上五名)

兼題 鮎 五月雨 枇杷

(業界用語) 見切れ

行く末はなるやうになれ枇杷を食ふ

一化

鮎の席まず腸で杯交はし

フミ

薪能シテの見切れる無料席

光野

大御所のカンペ見切れて冷や素麺

幸雄

五月雨や帰りたき日の遠くあり

フミ

五月雨を連れて居座る縄暖簾

フミ

廃屋の主の思ひや枇杷たわわ

フミ

今様は臍見切れたる夏衣

一化

故郷の盆地は今日もさみだるる

フミ

青嵐そは少年のドラクロア

備後

五月雨見切れた猫の声高し

フミ

やわな歯と折り合ひつけて枇杷を噛む

一化

鮎焼くや塩をはじける尾の形

幸雄

下り舟速し五月雨最上川

光野

五月雨山の端までもぼかしをり

幸雄

玉の汗新米 A D 見切れをり

幸雄

さみだるる窓を見つめて頼に杖

一化

門限あり塀からのぞく枇杷の実よ

幸雄

五月雨や重くなりたる萱の屋根

光野

清流の香り纏ひて鮎一尾

フミ

天地の神呼寄せて鮎のこと

備後

次回・97回

2024年8月13日(火) 赤坂・麦屋

兼題 星祭 カンナ 南瓜

業界用語 板付き

\*\*\* \*\*

## 新入会員紹介

原真(はら しん)

62年生まれ、神奈川県出身。早稲田大卒。  
85年に共同通信社に入り、仙台、岐阜、京都、  
ニューヨークの支社局記者、本社文化部デスク、  
富山支局長などを経て現在、編集委員。  
放送をはじめとするメディアと、在日外国人  
ら社会的少数者の問題を中心に取材。

著書に「巨大メディアの逆説」「テレビの履

歴書」「テレビの実像」など。連載「わたしの

居場所」で平和・協同ジャーナリスト基金賞奨

励賞、貧困ジャーナリズム賞。

## 入会のご案内

約30年前に放送の担当になって以来、テレ  
ビ・ラジオの取材を細々と続けています。

放送担当記者の仕事は番組紹介や出演者イ  
ンタビューが中心と聞いていたのですが、T

BSオウム・ビデオ問題やNHKの一連の不  
祥事に巻き込まれ、夜討ち朝駆けの事件記者

と化しました。米国駐在中を含め、地上テレビ  
のデジタル化やインターネット動画配信の台

頭にも直面し、放送の娯楽や報道の面だけで  
なく、経営や技術さらには行政や法制度にも

取材を広げてきました。「民放は不要」とする  
安倍政権の放送改革案を報じたのは、その一

例です。

来春、日本で放送が始まって100年の節目を  
迎えるのを前に、今年1月から、ラジオ・テレ  
ビの歴史をたどる連載記事「音と光の世紀」を  
全国の新聞に配信しています。週1回、全50  
回の予定で、「放送人の証言」を参考にさせて  
いただいています。今後、会員の皆様に取材を  
お願いすることがあるかと存じますが、よろ  
しくお願いいたします。

☆ ☆ ☆

## 次屋尚(つぎや ひさし)

一九六五年愛媛県生まれ、香川県育ち。

早稲田大学卒業、木下プロダクションほか  
制作会社を経て05年日本テレビ入社。

主なプロデュースドラマ作品…「瑠璃の島」

「アイシテル」海容」「デカワンコ」「Mot

her」「Woman」など。09年国際ドラマ

フェスティバルプロデューサー賞、10年エ

ランドール賞・プロデューサー奨励賞、第五回

大山勝美賞受賞など。現在、日本テレビ・コン

テンツ制作局・統括プロデューサー。

## 入会のご案内

みなさま初めまして、次屋尚と申します。こ  
のたび大山勝美賞の選考委員を仰せつかるこ  
ととなり、これを機に「放送人の会」に加入さ  
せていただくこととなりました、どうぞよろ  
しくお願いいたします。

わたくし事、気が付けばテレビドラマ制作  
という仕事に従事して何とまあ35年が過ぎ  
ておりました。テレビ放送史の後半分の長  
さをこの業界に身を置いていることとなりま  
す。びつくりしました。そして地上波テレビ放  
送は今まさに多メディア時代にあつて過渡期  
を迎えています。テレビドラマもまた、それが

担う役割の転換期と思われず。還暦を目前にし、テレビドラマを作ることしか知らずに生きてきた私はこの先どういう未来設計図を描けばいいものか、そろそろ悩み始めなきやな、と考えていたところでした。

そんな折「第23回放送人グランプリ」に立ち会わせていただきました。受賞者の方々のコメントが素晴らしいかったですね。みなさん伝えたい事で溢れかえっていました。目が輝いていました。作品への愛情がいつぱいでした。とても刺激を受けました、身を引き締める思いでした。わたしもまだまだ頑張らなくては、と思いました。

この会（放送人の会）の存在意義ってそういうことなんですね。これは大きな使命ですね。と、僥倖ながら感じてしまいました。少しでもその役割の一端を担えれば、と今は思っています。そのことを表明し、挨拶と代えさせていただきます。

☆ ☆ ☆

## 内山 聖子（うちやま さとこ）

一九六五年、福岡県生まれ。津田塾大学卒業後、88年テレビ朝日入社。

連続ドラマ「ガラスの仮面」「星軍の手帖」「交渉人」「必殺仕事人」「BG～身辺警護人」「七人の秘書」「ザ・トラベルナース」など多くを手掛け、スペシャルドラマ「それからの日々」「時は立ち止まらない」は芸術祭最優秀賞・放送人グランプリ大賞など受賞。米倉涼子主演「ドクターXシリーズ」（12・21年）では、すべてが民放全ドラマの年間視聴率トップに。

エランドール賞プロデューサー奨励賞、放送ウーマン賞、日経エンタテインメントベストクリエーター賞など受賞。

現在、テレビ朝日取締役コンテンツ編成局

エグゼクティブプロデューサー。

## 入会のご案内

歴史ある「放送人の会」に入会させていただきますこととなりました。

自身も数年前に大山勝美賞をいただき、放送人として誇らしく、その後の精進を誓った記憶があります。メディア激動の時代と言われ、テレビドラマが「コンテンツ」と言われるようになりましたが、人の心の中継ぎであり、なにより人の心を動かす物語の創出に軸を置きながら、放送全体を支える一員であり、放送人の仲間と一緒に新しい価値を見出していきます。よう、この会でも尽力いたします。

よろしく願いいたします。

☆ ☆ ☆

退会 新井和子、磯智明、臼杵敬子、軽部淳

川淵恵子、坂元良江、志村一隆、鈴木弘貴

林宣昭、藤井チズ子、松尾羊一、三上義智

三村景一、山田良明

\*\*\* \*\*

編集後記▼お忙しい中、放送人グランプリの「校正原稿」をお願いした皆さま、誠にありがとうございました。そして、おめでとうございます。▼放送人の会が奮めるのがモットーです。誉めて素敵な放送文化を支えたいと願うものです。▼「バック」に出演された作曲家・小室等さんにはドラマの音楽を4作品も担当していただいた。82年の「太陽の子」、88年大阪制作の「さよなら雷運（シユエレン）」この二つは演出だった。90年大阪制作の「李君の明日」、03年の「蟬しぐれ」こちらの二つは制作だった。小室さんの音楽録音は手作りだから楽しい。楽しいから癖になる…。▼会員の皆様、原稿ありがとうございます。次号も宜しく。発行は9月下旬の予定です。（たかゆき）

## 会員名簿

2024.06.14 現在

【あ】相田洋 青木裕子 青山悌三 秋田和典 雨宮望 【い】石井彰 石井ふく子 石田研一 石橋映里 石橋冠 石原信和 板谷駿一 市岡康子 市川哲夫 市村元 伊藤博文 井上佳子 今井義典 芋原一善 岩澤敏 岩瀬弥永子 【う】上村忠 浮田周男 内山聖子 【え】江川雄一 遠藤利男 【お】大池雅光 大浦勝 大川光行 大沢悠里 太田昌宏 大類なぎさ 緒方陽一 岡田裕克 岡室美奈子 岡本勉 小川治 小川和之 織田晃之祐 【か】加賀美幸子 柏木登 片岡敬司 加藤滋紀 加藤義人 金平茂紀 川平朝清 鎌内啓子 亀谷弘美 川喜田尚 河邑厚徳 【き】北川信 北出晃 北村美憲 北村充史 木下浩一 木原毅 木村成忠 【く】工藤英博 隈部紀生 訓覇圭 黒崎博 黒沢淳 【こ】小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 後藤和晃 小山紳人 近藤邦勝 今野勉 【さ】斎藤秀夫 斎明寺以玖子 寒河江正 桜井元 佐々木彰 佐々木光政 佐藤敦 佐藤幹夫 佐藤理恵子 佐野有利 【し】塩田純 重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 清水誠 下崎寛 下重暁子 下村幸子 白井博 新山賢治 【す】菅野高至 菅野嘉則 杉田成道 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木芳夫 鈴木嘉一 須磨章 【せ】清野豊 関佳史 せんぼんよしこ 【そ】曾根英二 【た】高田宏 田澤正稔 多田健 田中秋夫 田中直人 田中典子 田中則広 【ち】千葉邦彦 【つ】塚原あゆ子 塚本幹夫 次屋尚 辻本昌平 土屋敏男 つボイノリオ 露木茂 【と】東城祐司 戸田桂太 富澤一誠 鳥谷規 【な】長井展光 中込卓也 中崎清栄 中島僚 中島由貴 永田浩三 永田俊和 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村英美子 中山和記 【に】西村与志木 仁藤雅夫 二宮文彦 【ぬ】沼田通嗣 【の】信井文夫 延江浩 【は】萩原豊 林健嗣 林安二 林隆太郎 原真 原田令嗣 【ひ】日笠昭彦 玄武岩 【ふ】深尾隆一 藤井正博 藤久ミネ 藤村忠寿 古川重樹 【へ】逸見京子 【ま】前川英樹 牧之瀬恵子 増山麗央 松田幸雄 丸山友美 黛りんたろう 【み】光原朋秀 三原治 三村千鶴 宮川鑑一 宮崎洋 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】本木敦子 元田成 諸橋毅一 【や】八木康夫 矢島良彰 薮内広之 山鹿達也 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山登義明 山根基世 【よ】吉澤保 吉田賢策 吉村直樹 【わ】若泉久朗 和崎信哉 渡邊浩平 渡辺紘史（会員 188名）



【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟 放送人の会HP